

第 1 回
(9 月)

テスト 時 間	50 分
平均点 (都標準)	60 点

問題番号			正答率
1	(1)		86.1
	(2)		93.2
	(3)		94.6
	(4)		96.9
	(5)		29.2
2	(1)		58.7
	(2)		77.5
	(3)		47.7
	(4)		65.0
	(5)		76.5

問題番号			正答率
3	〔問 1 〕		67.8
	〔問 2 〕		57.1
	〔問 3 〕		71.4
	〔問 4 〕		58.2
	〔問 5 〕		60.2
4	〔問 1 〕		66.5
	〔問 2 〕		58.0
	〔問 3 〕		64.9
	〔問 4 〕		59.9
	〔問 5 〕		3.7点

問題番号			正答率
5	〔問 1 〕		87.6
	〔問 2 〕		52.1
	〔問 3 〕		14.4
	〔問 4 〕		39.5
	〔問 5 〕		60.3

注：4〔問 5 〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 会合への出席を強いる。
- (2) 朝から電車が遅延している。
- (3) 場所を塞いでいた荷物を移動する。
- (4) 議題から外れた唐突な発言をする。
- (5) 風邪の予防のためうがいを行行する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 敵の攻撃をシリゾける。
- (2) 友人の慰めによりスクわれる。
- (3) 食料を地下倉庫にチヨゾウする。
- (4) 体重がヒヨウジュンより少し軽い。
- (5) 雲一つないカイセイの空が広がる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

登磨とうまはとある山の登山口で、地元の食材を使ったこだわりのメニューを展開するレストランを開いている。登磨の甥おいの瑛太えいたは中学三年生で、彼の同級生の早苗さなえはレストランの常連客である。瑛太は二年の秋からテニス部に入り、エース格の早苗が何かと世話していた。ぐんぐん上達した瑛太は、夏の大会のメンバーを選考する部員同士の試合に勝って選ばれるが、ミスを連発した早苗は補欠になる。夏の大会を最後の試合と位置づけ全力を注いでいた早苗は、瑛太をねたみ下剤入りのサンドイッチを瑛太に差し入れ、試合に出られないように画策するが未遂に終わる。最近の早苗の不審な行動を見ていた登磨は、早苗の策略に気付いていた。早苗と二人で話す機会を得た登磨は、早苗を問い詰める。

登磨は黙して早苗を見つめる。

早苗は足を投げ出した。

蟻ありの行列が散り散りになる。

「もしバレたとしても、よかったんです。もうどうでもいい」

いつもの礼儀正しさは消え、すっかりやさぐれて開き直っている。

「瑛太君の叔父さんにこういうことをいうのは憚はばられるのですが、瑛太君が試合に出られなければそれでよかったんです。――すみませんでした」

憚られるなんて言葉、中学生が使う言葉なのだろうか。⁽¹⁾そういう馴染なじみのない言葉さえスルスルと出てくる子が何を血迷ってこんなことを。

「早苗ちゃん、調子悪かったんだって？ 瑛太がいった。冬頃、対戦して負けてからって」

「——はい。瑛太君との対戦でした。あんなに強くなってたなんて計算外でした。初めのうちは、手加減してあげようなんて上から目線の考えで臨んだんですが、気づいたら本気出していました。で、負けたわけです」

瑛太との試合だったのか。瑛太はそこはいわなかった。あいつなりに思うところがあったのかもしれない。

早苗は、思い出したようにお茶に口をつけた。

「入部したての頃は、先輩たちや、あと試合でも負けてたんですが」

「そりゃよかった。先輩たちにも立場ってものがあるから」

「だんだん勝てるようになりました。二年生になったら、少なくとも部員には負けなくなっていました」

(2) 自慢する風でもなく、他人事ひとごとのように淡々と話していく。

「なのに数か月前に入ったばかりの、ラケットも握ったことのなかった瑛太君に負けるなんて」

(3) 膝の上で拳を作る。手の甲が白い。蜘蛛くもの巣状に走る血管が透けて見えている。実直に励んだ証あかしができたその手で、どういう思いで仕込んだのだろう。

「そこから不調になりました。肩が上がらなくなりました。テニスをする時だけ、なぜかバネみたいな動きになっちゃって、いうことを聞かず、使い物になりません。走るのもぎこちなくなりました。お医者さんに診みてもらいましたが、どこにも異常はないということで、なんの治療もしてもらえませんでした」

自分のことを使い物にならないといったその言葉が寒々しすぎて、腸はらわたを氷の手でむんずとつかまれたような気がしてくる。

「試合の後の部活で、ほかの部員が打ったボールを外したことがありました。それを、瑛太君に見られました。瑛太君はちょっと笑いました。いつも無表情でプレーしているのに、その時だけ笑ったんです。完全に見下されました。新人の彼に、ずっと前からいて、部長で、瑛太君にラケットの使い方から教えたあたしが、馬鹿にされたんです。自分でもびっくりするくらい腹が立ちました。瑛太君が入ってきた時の嬉うれしさが消えて、憎しみすら覚えました」

可愛かわいさ余って憎さ百倍、というやつだろうか。話を先に進めるために登磨あいづちは相槌さづを打つ。

今は、ボールを拾ったり、道具のメンテナン*スにいそしんでいるという。

「努力してきたことが、必ずしも報われるということはないんですね」

早苗はため息とともに、空虚なまなざしを足元に落とした。

蟻がまた集まってきて、少しずつ行儀のいい列を成し始めている。

「早苗ちゃんはテニス、楽しんだ？」

「……最近じゃ、全然楽しくなくて、部活が憂鬱です。あんなに好きだったのに。嫌いになんか、なりたくなかったのに。嫌になってしまったのかもしれません」

拳が軋きしむ。薄い皮膚が突っ張って、関節のところから裂けていきそうだと。どっちのことをいっているのだろう、と登磨は淡く検討する。

あるいは「どっち」ばかりではなく、それには自分自身も含まれるのだろうか。

お茶を口にした登磨は、太ももに肘を乗せて前屈まえかがみになる。首のところをつまんだペットボトルの中で、わかば色の液体が揺れる。

「つまりは負けたから嫌いになって、勝ってるうちは好きでいるってことか。⁽⁴⁾勝ち負けって影響力すごいね。ところがどっこい幸いなことに、勝ち負けを重視する部活はそろそろ終わる。終わるんだからもう誰かと競うこともない。ここからは自由だったこと。やりたくなったらやればいいし、やりたくなかったらやんなくていいわけ」

早苗は、顔を上げて目を丸くして登磨を見る。

「休めば、また向き合えるようになるよ」

「なりません！」

早苗が強く否定した。

登磨は眉を上げる。

「君、否定する声は大きいんだね」

早苗が目の周りを赤くにじませる。

「……店長さんには分かりませんよ。挫折なんてしたことないですよ」

「分かんないよ、テニスはやったことないから」

早苗が、意表を突かれた顔で登磨を見た。目の周りの赤みが一気に引く。

料理で、ですよ、とゆっくりと念を押すようにいわれる。登磨はのほほんと頬をかいいた。

「ああ、料理。一時期休んでたことはあったけど、負けたことはない」

臆面もなくいい切った登磨に、早苗が呆気^{あっけ}に取られている。

「だってオレ、誰かと競ったことがないから」

⁽⁵⁾早苗が登磨を見つめて瞬^{またた}きした。その目の奥には、たった今、投げやりな態度をとっていたとは思えぬほどの聡明^{そうめい}さがにじんでいて、それは、以前の早苗のまなざしそのものだ。

「まずはさ、自分を褒めてやらない？ 一度、自分がしてきた努力を振り返って見たらどうかな。今の自分が自分史上一番の年長さんなら、その手のマメを作ってきたのは今より未熟な年下の自分のわけだ。未熟な自分が頑張ってきたのを一番よく知ってるのは、早苗ちゃん自身なんだよ。だつたらさ、強く否定するその同じ口でさ、よく頑張ってきたって年下の自分を褒めてやろうよ」

一度引いた早苗の目の周りの赤みが、じんわりと蘇^{よみがえ}る。

どこか遠いところで、鳥追いの空砲が上がった。果てのない空に響いて染^しみ渡り、やがて馴染んで消えた。

登磨はペットボトルに口をつける。

苦くてかすかに甘い冷えたお茶が、火照^{ほて}った体を冷やしていく。

「早苗ちゃん、テニス始めたばかりの時の気持ちって覚えてるかい？」

(高森美由紀「山のふもとのブレイクタイム」中央公論新社 による)

〔注〕 やさぐれて——ふてくされて自暴自棄なさまで。

メンテナンス——整備。

〔問1〕 ⁽¹⁾ そういう馴染^{なじ}みのない言葉さえスルスルと出てくる子が何を血

迷ってこんなことを。とあるが、このときの登磨の気持ちに最も近

いのは、次のうちではどれか。

ア 中学生には馴染みのない言葉が使えるということから、よく考えて行

動できるだろうと思ひ込んでしまうのは早合点だったと自省する気持ち。

イ 中学生らしくない言葉を使いこなす大人びた早苗が、子供じみた浅はかな行為に走ってしまったのが気の毒でいたたまれないと思う気持ち。

ウ 普段から言葉を大切にしているはずの早苗でも愚かな行為をしてしま

うのだから、理性と感情は別のものであると素直に納得する気持ち。

エ きちんと物事を考えられそうに思える早苗がなぜ愚かしい行為に及ん

だのか理解に苦しむところであり、その理由を知りたいと思う気持ち。

〔問2〕⁽²⁾ 自慢する風でもなく、他人事^{ひとごと}のように淡々と話していく。とある

が、この表現から読み取れる早苗の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 誰よりもこつこつ努力してきた自分が不覚にも愚かな行為に及んだ無念さを理解してほしくて、私情を交えずに事実だけを語る様子。

イ 自分には実力があるのだと思いあがっていたその心こそが愚かな行為を招いたのだと悟って、過去を客観的に振り返り反省する様子。

ウ 望んでいた大会への出場を逃した今の自分には、かつて誇りに思っていたことも何の意味もなく感じられ、投げやりになっている様子。

エ 今振り返ると過去の自分が実力を過信していたことは認めざるをえないので、過去の輝かしい実績には何のこだわりも感じていない様子。

〔問3〕⁽³⁾ 膝の上で拳を作る。手の甲が白い。蜘蛛^{くも}の巣状に走る血管が透けて見えている。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア やり場のない悔しさをかみしめる今の早苗の様子を、登磨の視点の短い文を重ね、比喻を効果的に用いることで写實的に表現している。

イ 早苗がこれまで懸命に努力を重ねてきたことを認めようとする登磨の心情を、情感豊かな言葉で強調しながら主観的に表現している。

ウ 実直に努力してきた早苗が愚かな行為に走ったことを寂しく思う登磨

の心情を、手の多様な描写を通して感覚的に表現している。

エ 登磨と話すうちに気持ちの高ぶりを制御できなくなっていく早苗の様子を、大げさな言い回しを用いて幻想的に表現している。

〔問4〕⁽⁴⁾ 勝ち負けって影響力すごいね。とあるが、このときの登磨の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 勝ち負けが好き嫌いにつながるという早苗の言葉が自分にとって新鮮な驚きだったので、言葉にして確実に受け止めようとする気持ち。

イ 勝つことが好きにつながるという早苗の感じ方に共感できるので、自分も同様の考えであることを伝えて安心させようとする気持ち。

ウ 皮肉をこめた言い回しで今の早苗の状況を表すことで、早苗のテニスへの向き合い方は正しいものではないと伝えようとする気持ち。

エ テニスに打ち込む早苗を応援してきたのに、早苗の本心を知って裏切られたように感じ、冗談を言って悔しさを紛らそうとする気持ち。

〔問5〕⁽⁵⁾ 早苗が登磨を見つめて瞬^{またた}きした。とあるが、そのわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 競争したことがないという登磨の生き方を知り、負けて落ち込み、勝負にこだわり続けていた自分が恥ずかしくなったから。

イ 競争して勝つことに意味があるという自分の考え方とは異なるテニスへの接し方があると示唆され、一瞬胸を突かれたから。

ウ 自分とは違う世界で生きている大人の言葉に引きつけられ、その真意を何とか理解しようとして、気持ちを集中させたから。

エ 困難なことばかりで辛い^{つら}思いをしてきた自分と比べ、登磨は何の苦労もなく楽な生き方をしており、その差に愕然^{がくぜん}としたから。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

身体を持ってこの世界に生きるということ、それはイコール、それぞれの身体で様々なことにぶつかり成長していくということです。生物から由来したこの身体は、人や社会と矛盾し、衝突します。そこに苦しみや楽しみが生まれます。家族、学校、会社……人は社会をつくりあげ、私たちはそのなかで生きています。その生きるための主軸が、身体です。（第一段）

そして身体は、様々な意味を私たちにもたらしめます。たとえば私たちの顔や身体は人目にさらされ続け、評価されながら生きていきます。太っているとかやせているとか、そんな見た目の評価に人は苦しむことがあります。（第二段）

男らしいとか女らしいとかで、ふるまいや服装まで決められることもあります。人は相手を型にはめて判断しがちなところがあるので、注意しなければなりません。（第三段）

見た目の評価は、その人自身をあらわすわけではありません。それでも、評価は気になります。それが苦しみをもたらすこともあるでしょう、⁽¹⁾異質なもの⁽¹⁾をこばみ、平均をよしとする圧力の強い日本の社会では、特に注意する必要があります。（第四段）

人は異質なものをみると驚きますが、それは自然な反応で、驚き自体は中立的な感情です。異質なもののへの驚きを^{*}ポジティブにおもしろがって受け入れることもできますが、今の日本人は^{*}ネガティブにとらえて拒否する傾向が強いように感じます。（第五段）

見知らぬものを受け入れるか拒絶するかは、どちらかというと後天的な

学習によるものです。それは赤ちゃんの実験からも示されます。生後10か月頃の赤ちゃんは見知らぬ人に出会うと驚き、自分を抱っこしている親の表情をのぞき見ます。親の表情から、行動を変えるのです。親が不安そうな顔をしていたら泣いて拒絶し、安心した表情であればほほ笑んで受け入れる。これは「社会的参照」とよばれる現象で、つまり、見知らぬ人を拒絶するか受け入れるかは、親の行動にしたがうのです。（第六段）

くり返しになりますが、今の日本社会は、異質なものをネガティブにとらえる傾向が強いと感じます。そうした心理は親を通じて、あるいは周囲の大人や友人を通じて、子どもたちに受けつがれるのかもしれません。（第七段）

しかし今はそうであっても、ひとりひとりの行動が変わっていけば、後の世代の学習は変わるかもしれません。⁽²⁾「社会的参照」の学習によって、将来的には全体の行動も変化する可能性もあるのです。（第八段）

身体の使い方に話を変えようと、第1章で述べたように、実際に身体を使って動き回ることによって、身体感覚は熟達することがわかりました。身体を使った学習で、この世界によりよく適応できるすべを学んでいくのです。そのためには、頭でっかちにならずに身体を動かすことが大切です。様々な特殊感覚も学習のたまものであったように、その特殊な技能を得る背景にあるのは学習なのです。（第九段）

身体を健全に成長させるためには、身体を使うことこそが大切です。しかし頭でっかちになってしまった人は、身体を使うことをためらいがちです。その理由のひとつに、痛みへの恐怖があるでしょう。痛みはつらいもので、できれば避けたいものです。ですがその一方で痛みは、生きている

実感を支える大切な感覚でもあります。(第十段)

痛みは、「これ以上は危ない」「これは気を付けなくてはいけない」という身体の限界を教えてください。それだけでなく、自身の痛みの経験は、実感を持って他者の痛みを感じとることにつながります。社会性の原点がそこにあるのです。私たちは、痛みからの教えを、大切なものとして受け止めるべきではないでしょうか。(第十一段)

痛みを避ける根底にあるのは、不安や恐れなのでしょう。不安や怖さは、時として私たちの歩みを止めます。誰もが避けて通りたい試験や注射など、体験する前は不安で怖くてしかたなかったけれど、実際に体験してみたら、そうでもなかったという経験はありませんか？たとえば最も恐ろしい病のひとつであるがんを前にして、自分の負の面を知る怖さは、数値にあらわれています。「平成26年度内閣府がん対策に関する世論調査」によれば、自分の状況を知って治療をすれば治る病でもあるにもかかわらず、がん検診を受けない理由に「がんであるとわかるのが怖いから」が、時間がない、経済的負担の次の第3位にあがっています。(第十二段)

不安や恐怖は目の前の行動を止め、身体の学習をはばむ障壁となります。しかも不安や恐怖には、「つかみどころがない」という問題があります。それは痛みも同様で、主観的であいまいです。たとえば同じ傷をおったとしても、大きな痛みを感じる人もいれば、それほど感じない人もいます。しかし痛みの原因である傷や、それから生じる感覚は存在します。受けた感覚をどう評価するかだけが、人によって異なるのです。(第十三段)

一方、不安や恐怖は、これから先の未来に生じることへの恐れによって生じます。そこには感覚はありません。頭でっかちな「認知」から、目の

前の行動を止めるのが、不安や恐怖なのです。(第十四段)

このように説明すると、恐怖や不安は悪い感情にみえます。しかし本来の恐怖や不安は、危険を回避するという重要な働きをします。たとえば危険な状況や危険な人物に出会った際に、不安や恐怖から立ちすくむことによって、危険な事態に近づかないように働きます。(第十五段)

この働きをつかさどるのが、脳の中の扁桃体へんとうたいとよばれる部位で、先にも触れたように過度な恐怖の体験にさらされ続けると、扁桃体の働きはおかしくなりました。不安や恐怖は適切に働けばいいのですが、そうでない場合もあるのです。(第十六段)

また、不安や恐怖の反応の強さは人によって異なり、それはそれぞれの経験だけでなく、生まれつきの性格によっても決まります。たとえば筆者はどちらかというと、不安や恐怖を大きく見積もりがちなタイプで、その結果、痛みの学習がうまくできなかったように思います。だからなおいっそう、痛みを知ることの重要性を感じるのです。(第十七段)

⁽³⁾痛みを通して、私たちはこの現実とその多様性をよりリアルに味わうのではないのでしょうか？コンクリートの地面ですりむいてヒリヒリした膝の痛み、友達とのちょっとしたけんかで感じる心の苦い痛み、自分の気持ちに相手に理解されないという重い痛み……それぞれの痛みの違いから、この現実の多様性や多面性を感じていきます。それは頭で考えたものとは決定的に違う、リアルさがあるのです。(第十八段)

それらは、あなたの人生を深めるのではないのでしょうか。様々な痛みを知ることに、他者の痛みへの理解が深まるように思うのです。それだけではありません。様々な体験を経ることにより、本来あなた自身が持つ

ていた、恐怖や不安の傾向も少しずつ軽減されていくのではないでしようか。(第十九段)

私自身のことをいえば、がんという病に出合って、押しつぶされるような怖さは、ひたすら治療を続けるなかで、毎日のつらさやしんどさに変わっていきました。治療でしびれる手や動作の不自由さを日々感じる方が重くつらく、お年寄りの人たちのゆっくりした動作にも共感を持って気を配るようになりました。恐怖や不安が軽減されていくと、気持ちもだんだんと軽くなっていきます。そんな方向に人生のかじを切ってもらえるとよいなと思います。(第二十段)

(山口真美「ところと身体のパシキ学」による)

〔注〕 ポジティブ——肯定的。

ネガティブ——否定的。

〔問1〕⁽¹⁾ 異質なものをごばみ、平均をよしとする圧力の強い日本の社会では、特に注意する必要があります。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 異質なものを受け入れるかどうかは後天的な学習によるものなので、日常生活でどのような行動をとるかによって学習の成果が試される、と考えたから。

イ 顔や身体はその人の生き方や心の状態の表れだととらえられることが一般的なので、見た目の評価も重要であることを認識する必要がある、と考えたから。

ウ 異質なものを見て驚くのは自然な反応だが、異質なものをごバティブ

にとらえて拒否するのはよくないことだという視点を持つべきである、と考えたから。

エ 顔や身体などの見た目が他と異なっているとどのような評価をされるかわからないので、自分の外見については特に気を遣うべきである、と考えたから。

〔問2〕 この文章の構成における第六段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第五段で述べた「傾向」について、その原因を示すためのわかりやすい事例を挙げ、論を展開するための前置きとしている。

イ 第五段で述べた「傾向」を受けて、それが一般社会でどのような事例となって表れるかを示し、論のあらましをまとめている。

ウ 第五段で述べた「評価」について、それとは逆の考え方を示し、両者を対照させることで筆者の論の焦点を明確にしている。

エ 第五段で述べた「評価」について、それを別の視点からとらえ直して分析することで新たな問題を提起し、結論へと導いている。

〔問3〕⁽²⁾ 「社会的参照」の学習によって、将来的には全体の行動も変化する可能性もあるのです。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「社会的参照」は幼いころに親の行動を見ることで学習する事柄なので、親の態度の変化がそのまま子に反映する可能性があること。

イ 幼いころに親や周囲の大人や友人から学習した内容は、その後の「社会的参照」によって、成長とともに変化していく可能性があること。

ウ 世代が交代することによって、「社会的参照」の内容も変化していき、

ひとりひとりの成長の度合いも変化する可能性があるということ。

Ⅰ 親や周囲の大人、友人の行動や考え方が変わること、**「社会的参照」**により、後の世代の行動も変化する可能性があるということ。

〔問4〕⁽³⁾ 痛みを通して、私たちはこの現実とその多様性をよりリアルに味わうのではないのでしょうか？ とあるが、「痛みを通して」「この現実と多様性をよりリアルに味わう」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 身体的な痛みや精神的な痛みを実際に感じることで、周囲の現実を身体的なものと精神的なものに明確に分けて理解できるようになること。

イ さまざまな程度や対象の異なる痛みを感じることで、身体の限界を知り、恐怖や不安が軽減され、他者の痛みへの理解が深まっていくこと。

ウ 現実にあるさまざまな痛みを実感することで、自分に対しても他者に対しても、それらの痛みに対処する方法が明らかになっていくこと。

エ 実際に経験した痛みによって、想像上の痛みに対する恐怖心や不安が消え、さまざまな苦難を乗り越えて強い心が持てるようになること。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「身体を使うこと」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて**二百字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文のあとの
 A・Bは、本文中のaの和歌とbの古文の現代語訳である。（*
 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

ここ数年、主に若者たちの間で広まっている、夏目漱石（そうせき）に関する一つの逸話を御存じだろうか。話は漱石が英語教師をしていた頃のこと、**□** love you」を「私はあなたを愛しています」と直訳しようとした学生に對して、「日本人はそんなことは言わない。『月が綺麗（きれい）ですね』とでも訳しておきなさい」と諭したとされるものである。（中略）

ところが実際には、この逸話は確かな史料等に基づいたものではなく、本当にそのようなことを漱石が語ったのか、どうやらかなり信憑性（しんぴやうせい）の低いものであるらしい。この逸話に関する言説を網羅的に収集したブログ（*）の記事を信じるならば、一九七〇年代頃になって突如語られはじめた、都市伝説（でんせつ）の如き逸話のようなのである。

もしこの逸話が嘘（うそ）なのだとしたら、それはもちろん残念なことに違いはない。しかし仮にそうだととしても、およそ人口に膾炙（かいしや）する嘘には、（*）遍く一面の真実が含まれているものだろう。この話にしても、漱石の文学的感性にまつわる何かしらを伝えるものであったからこそ、広く受け容れられたのではあるまいか。実際ここには、翻訳とは何か、洋の東西という異文化の懸隔（*）といかに向かい合うべきかなどといった、漱石が実際に格闘したであろう文学的課題と、それに対する彼ならではの回答が、見事に表現されているようにも思える。

さて、仮にこの逸話が創られたものであったとして、その中で稿者が特に興味を惹かれるのが、漱石が述べたという「月が綺麗ですね」という文

句の出処である。「I love you」を何と訳すか、そこにこの話の肝（1）があることは動かない。ならばこの話の作成者は、どこから「月が綺麗ですね」という叙情的な一文を引っ張ってきたのだろうか。

そもそも「月が綺麗ですね」という文句が「I love you」の邦訳として成立する背景を考えてみたい。まず当然のことながら、この台詞（せりふ）を述べた（おそらく）男は、相手に自分の思いを伝えたいと望んでいる。しかし同時に、それとはつきりわかる形で伝えるのも、恥じらいや恐れがあつてためらわれる。そして、かかる心の揺れを抱いた男は、夜空に浮かぶ月に女を誘導する。

確かに、月は美しいものだ。だが男の台詞には、女の同意を取り付けようとする、切なくもいじらしい思惑が見え隠れしてはいないか。「綺麗ですね」という、同意を迫る言い方に注意したい。もしも同意が得られれば、ならば二人で月を見ましよう、次の段階へと進むことができるかもしれない。できれば空気を読んで、その意を汲み取ってくれるような女性であることを、男は願っているようにすら思える。このような発想に拠ったとき、「月が綺麗ですね」という台詞は、告白の言葉として読み替えられるだろう。

実は古典和歌の中にも、同じような発想になるものを見出すことができる。『古今和歌集』恋四・六九二番、詠み人知らずの歌に就きたい。

a 月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず（2）

「待たずしもあらず」というのは、「待っていないわけではない」という

意ではあるが、この否定語を二つ重ねた、屈折した言い回しからは、むしろ「あなたが来てくれることを、強く願っている」というニュアンスを汲み取るべきだろう。

このような感性は、『古今和歌集』の時代から一千年以上を経た現代でも変わるまい。例えばメールでもラインでも構わないが、意中の異性に対して「月が綺麗ですね」というメッセージを送る場面を想起してみると良い。そこには前述のような、少しでも相手との距離を縮めたいという、けな気ともいうべき願いが隠れてはいないか。「月夜よし」という字面^{じづら}だけならば、「理性的には待っていない。けれども、心の奥底では」、本当は待っているはずだ。

あるいは本当にただ月が綺麗だという事実を伝えたいのだとしても、受け取る相手はそうは解釈しないかもしれない。⁽³⁾俗な言い方が許されるのであれば、友達以上恋人未満という関係性が、言葉の意味を変えてしまうのである。冒頭に挙げた漱石の逸話も、かかる関係性を読み取ってはじめて意味をなすものだろう。

さらに考えを進めてみよう。⁽⁴⁾何かしら相手との距離を縮めるものとして、それではなぜ月がことさら選り取られたのであろうか。古来、月が日本人に愛されてきたことは論ずるまでもないが、もう少しその中身に踏み込みたい。いったい、古典の人たちにとって、月はそれを見る度に、親しい人の存在を想起させる存在であった。例えば『和泉式部日記』^{わいすみ}は、以下のよな話を載せる。

b 九月廿日^{はつか}あまりばかりの有明^{*ありあけ}の月に、御目さまして、いみじう久しう

もなりにけるかな、あはれ^ア、この月は見るらむかし、人やあるらむ、とおぼせど、例の童^{わらは}ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせ給^{たま}ふに、女、目をさまして、よろづ思^イひつづけ臥^ふしたるほどなりけり。すべてこのころは、折からにや、もの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。あやし、誰ならむ、と思ひて、前なる人を起こして問はせむとすれど、とみにも起きず^ウ。からうじて起こしても、ここかしこのものにあたり騒ぐほどに、たたきやみぬ。帰りぬるにやあらむ、いぎたなしとおぼされぬるにこそ、もの思はぬさまなれ、同じ心にまだねざりける人かな、誰ならむ、と思ふ。^エ

九月二〇日すぎの有明の月の頃、女（和泉式部）のもとを恋人の宮（敦道親王^{しんのう}）が来訪する、古来よく知られた場面である。ここ数か月、二人の間には微妙な空気が漂っており、事実、宮は「人やあるらむ」と、女のもとに他の男が来ている可能性を疑っている。にもかかわらず女のことを思い出し、来訪すら決意したのは、宮が有明の月を見て、彼女も自分と同じようにこの月を見ているのではないかと思ったからであった。一方、女もただ一人起きてこの月を眺めていた。不運にも門を開ける前に宮は帰ってしまったが、女も「同じ心」に月を眺めていた人の存在に、思いを馳^はせる。この「同じ心」とは古典にしばしば見られるもので、同じように情趣を解し、同種の感性で共感できる友人や恋人のことを表現する場合が多い。そして『和泉式部日記』において、女と宮とが互いの「同じ心」を確認し合ったものこそ、有明の「月」であった。二〇日すぎの有明の月といえ、東の空に顔を出すのはかなりの深夜、余程その情趣を愛する者でない限り、

起きてその月を眺めようとは思うまい。女と宮は自分たちが心を同じくしている、その絆きずなを強く感じ合ったことだろう。この後二人は和歌を交わし合い、離れていた距離は急速に縮まることとなる。その和歌は、あの夜美しい月を見ていたことを、互いに確認するものであった。

* 如上、月がその役割を果たしたのは、遠く離れていてもともに月を見上げることができたがために他ならない。インターネットもスマートフォンもない時代である。月を眺めることは、遠い距離に隔てられた二人が心を交わし合う貴重な契機であった。今、あなたと同じ月を見ている、かかる感覚を得られることこそ、月の情趣の淵源*えんげんの一つだったのである。

(中野貴文「古典との出会い方」による)

A 美しい月の出ている素敵な夜だと人に告げたなら、
待っていないわけでもないのだけれど。

B 九月二〇日すぎの有明の月のころに、親王さまは目を覚まされ、たいそう長い間会わないでいたことだな、ああ、今ごろあの人もこの月を見ているだろう。それともほかの誰かが来ているだろうかとお思いになったが、いつものように付きそいの童を供にしておいでになり、童に門をたたかせると、女は目を覚ましていて、さまざまなことを思いながら横になっているところだった。およそこのころは秋の終わりという時節がら、何となく心細く、いつもより寂しく感じて物思いにふけていた。変だわ、誰だろうと思ひ、そばに寝ている侍女を起こして問わせようとしたが、なかなか起きない。やっと起こしたが、暗

くてあちこちぶつかって騒ぐうちに、門をたたく音がやんだ。帰ってしまったのだろうか。寝坊な女だと思われたにちががなく、いかにも物思いのない女のようにみえる。が、私と同じ思いで、こんな時間まで寝なかった人なのだ、誰だろうと思った。

〔注〕 ブログ——私的な事柄などの記事を簡便な方法で作成し、公開

することができるとウェブサイトの総称。

人口に膾炙かいしやする——世間の人々の話題になる。

遍あまねく——もれなくすべてに及ぶさま。

懸隔——ひじょうにかけ離れていること。

邦訳——外国語で書かれた文章を日本語に訳すこと。

和泉式部いずみ——平安時代中期の女流歌人。

有明ありあけの月——夜明けに空に残っている月。

如上——前に述べたように。

淵源えんげん——物事の起こり基づくところ。根源。

〔問1〕⁽¹⁾ 肝かん とあるが、これと同じ意味で用いられているものは、次の四

つの「肝」のうちではどれか。

A わき道から車が飛び出してきて肝を冷やした。

イ 肝がすわっていて多少のことでは驚かない。

ウ 講演の肝になる部分をメモする。

エ 先生の言葉を肝に銘じておく。

〔問2〕 来てふに似たり⁽²⁾ の現代語訳が、Aの に入る。その

の言葉として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 来てくれたらうれしいと思う

イ 来てほしいと言うのと同じだ

ウ 来てくれなくても仕方ない

エ 来てほしいなどとは言えない

〔問3〕 俗な言い方が許されるのであれば、友達以上恋人未満という関係

性が、言葉の意味を変えてしまうのである。とあるが、「友達以上

恋人未満という関係性が、言葉の意味を変えてしまう」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 友達であるか恋人であるかの違いで、同じ言葉であっても、事実を伝えているのか告白であるのかの差が生じるということ。

イ 友達より恋人でありたいという思いがあれば、客観的な事象を言う言葉が告白の言葉として機能するということ。

ウ 友達ではなく恋人になってほしいとき、明確な告白の言葉より、遠回しな表現のほうが効果的であるということ。

エ 友達と恋人の間の関係にあるとき、一つの言葉の意味をどう受けとめるかによって、その後の関係性が決まるということ。

〔問4〕 何かしら相手との距離を縮めるものとして、それではなぜ月がこ

とさら選り取られたのであろうか。とあるが、「相手との距離を縮めるもの」として「月がことさら選り取られた」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 月を見ながら物思いにふけるという情趣のあり方は特別なものであり、

それを解する者同士ならば自然に引かれ合うから。

イ 同じ夜、同じ美しい月を見ていたことを詠んだ和歌を交わし合うことで、お互いの心がわかり、絆を強く感じ合えるから。

ウ 月を見るために深夜まで起きているという生活習慣の者同士なら、日常の過ごし方も似たものとなり親近感がわくから。

エ 情趣を解し、同種の感性で共感できる者同士なら、離れていてもともに同じ月を見ているという感覚を抱けるから。

〔問5〕 bの中の『』を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と同じ書き表し方のものを一つ選り、記号で答えよ。

合と同じ書き表し方のものを一つ選り、記号で答えよ。

第 2 回
(10月)

テスト 時 間	50 分
平均点 (都標準)	58 点

問題番号			正答率		
1	(1)		72.5		
	(2)		79.5		
	(3)		45.4		
	(4)		82.2		
	(5)		88.2		
2	(1)		69.5		
	(2)		53.2		
	(3)		76.8		
	(4)		62.7		
	(5)		61.9		
問題番号			正答率		
3	〔問 1〕		78.3		
	〔問 2〕		79.4		
	〔問 3〕		73.1		
	〔問 4〕		78.5		
	〔問 5〕		46.9		
4	〔問 1〕		61.1		
	〔問 2〕		58.1		
	〔問 3〕		72.1		
	〔問 4〕		26.6		
	〔問 5〕		3.4点		
問題番号			正答率		
5	〔問 1〕		41.0		
	〔問 2〕		43.8		
	〔問 3〕		49.6		
	〔問 4〕		31.3		
	〔問 5〕		54.8		

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) どこからか哀愁^{あいう}を帯びたメロディーが聞こえる。
- (2) お互いに譲歩^{じやうぽ}したことで交渉がまとまった。
- (3) 友人の思い違いを粘り強く論^{ろん}した。
- (4) 心身ともに疲弊^{へい}してしまった。
- (5) 福祉に関する仕事に携^{たづな}わる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 毎日キビしい特訓^{とくくん}を重ねてきた。
- (2) 気になる映画のヒビヨウ^{ひびよう}を読んだ。
- (3) ケワ^{けわ}しい山道をなんとか登りきった。
- (4) 住民投票によって計画のサンピ^{さんぴ}を問う。
- (5) 粉末スープにネットウ^{ねっとう}をかけてよくかき混ぜる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

突発性難聴で左耳が聞こえなくなってしまった中学二年生の「わたし」(山口結^{ゆい})は、そのことを周りに言えなかったが、手話サークルに参加し、同じ病気で両耳が聞こえない今日子^{きょうこ}さんと出会って意識を変えていく。あるとき手話サークルは、耳の聞こえない人が病院に行ったときに困ることをまとめたパンフレットを配るにあたり、イベントの一つとしてパンフレットの内容に関するコントを行うことになる。コントは、発語は可能だが高度な難聴である五十代くらいの大船^{おおふね}さんと二十代後半くらいの若田^{わかた}さんというパントマイムをやっている二人が行い、「わたし」はコントの内容作りに関わることになった。三人は、練習のために予約した公民館にやって来る。

「だから予約は五時からだっていつているでしょう。あと一時間後。い、ち、じ、か、ん、ご。一時間後にきてください」

職員はメモ用紙に「五時から」と書いた。

大船さんは食いさがった。

「いおじ、よあく、しだ。いじあん、までない」

そのひとは後ろをふりむいて、ほかの職員に、どうするよというような顔をした。

いやな顔。

「部屋、空いてないんですか」

わたしはかみつくようにいった。

いおじ、を五時と、あなたはとったのですよね。あなたは自分の耳を疑うことをまるでしない。知らないで生きている。だけど、時間を間違えたのは、ほんとうはあなただ。あなたのミスだ。大船さんは四時とわかってい

る。間違えたのはあなただ。

「部屋は空いてないんですか、いま、空いてないんですか」

「空いてはいるけどね」

そのひとは、うさん臭そうにわたしを見た。

⁽¹⁾「なら貸してください。いまずぐ貸してください」

「貸してあげればいいじゃない」

ほかの職員の声がした。

そのひとは不機嫌そうな顔で鍵をくれた。

「つぎは注意してくださいよ。困るんだよね、こうゆうの」

廊下をしばらく進んでから大船さんはわたしの肩をたたき、受付をふり返って、声にはださずに「とーっ」といって、剣道で面を打つように両こぶしを上から下にふりおろした。若田さんは「うりゃあ」と背負い投げをするようにした。わたしも思いつきりアツカンベ⁽²⁾をした。声をださずに三人で笑った。

部屋に入ると、さっそくコントが始まった。ばっちりだった。あうんの呼吸って、こういうのをいうんだろうなあ。ふたりはあっという間に仕上げてしまい、どうかな、とわたしを見るから、頭の上で丸をつくった。練習は三十分もかからなかった。

受付でまたあのひとがいたらいやだなあ、そう思った。

でも、やっぱりいた。

今度はなにをいわれるんだろう。身構えた。

大船さんが鍵を返した。

「ありあど」

ありがとうと声にだして。

その鍵を、むすつとして取った。

なんていやなひとなんだろう。

公民館をでたところで、大船さんがわたしの背中をぽんぽんとたたいた。大船さんの気持ちが伝わってくる。⁽³⁾結ちゃん、気にするな。あんなことなど気にするな。気にする必要なんかいぞ。ふう。わたしの中を流れてい

たどくどくした気持ちが、ゆっくりと落ちつくところへ落ちていった。

家に帰ってまもなく、今日子さんからメールがきた。

コント、どうだった？

＊

バッチリです。大船さんも若田さんも、すごいです。

＊

よかった。結ちゃん、お疲れさまでした。ありがとう。

今日子さんにはいえなかった。でもママには、晩ごはんを食べながら、公民館でのことをぜんぶ話した。

「なにそれ。いまどき、そんなひとがいるの。しかも公務員じゃないの。結、いったいどの公民館？ 教えて！」

ママの怒りはすさまじかった。すぐに苦情の電話を入れようとした。

「大船さんも、若田さんも気にするなって」

「そんなこといったって、個人商店じゃないのよ。公民館なのよ」

「だけど、大船さんも若田さんもおとなだよ」

怒る必要があれば自分で怒るはず。ふたりは、にこにこしているひと

だったけど、にこにこしているだけのひとには見えなかった。

「結はそれでいいの？」

「いい」

「ほんとにいいの？」

「いい」

「ほんとうに、あんた、それでいいの？」

「いいってば」

逃げるようにそういった。

⁽⁴⁾
なかなか寝られなかった。

トゲのように引っかけたまま抜けない。

逃げた思いが抜けない。

なんでママはあんなに怒ったのだろう。

何度もママのことを考えた。

結はそれでいいの？

ほんとうに、あんた、それでいいの？

ママは、怒らなくてもいいのかと、わたしにきいた。

大船さんのために、もっと怒らなくていいのかと。

ほんとうにそうか？

……違うかも。そうじゃないかも。それもあるかもしれないけれど、それだけじゃない。ママが腹を立てたのは、あんなに感情的になったのは、わたしのためだ。わたしがとめなければ、ママは公民館に苦情の電話を入れた。公民館のひとが、いったいあなたはだれかときいたなら、ママは、

わたしの母だと答えるだろう。片耳が聞こえない娘の母だと答える。ママならそう答える。

受付のひとに文句をいったときの自分の顔がわかる。自分の顔なんか見えないけれど、はっきりとわかる。⁽⁵⁾両耳が聞こえますって顔をしている。受付のひとがどんなふうになわたしのことを思ったのかも、わかる。片耳が聞こえないなんて、まったく思っていない。あのひとが、うさん臭そうになわたしを見たとき、いってやればよかった。わたしは片耳が聞こえませんでした。なんでいえなかったんだろう。なんで、わたしはいえなかったんだろう。わたしの背中をたたいた大船さんの手はあんなにやさしかったのに。

(森埜こみち「蝶の羽ばたき、その先へ」による)

「問1」⁽¹⁾「なら貸してください。いますぐ貸してください」とあるが、こ

のときの「わたし」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。
ア 一時間後にくるように言われて困っていたところ、思いがけず部屋が空いていたので貸してもらえるように職員相手にへりくだる気持ち。
イ 自分を疑わず、聞き間違いに気づかない職員に対し繰り返し言うこと

で、部屋を貸してほしいという思いを理解してほしいと願う気持ち。

ウ 部屋を貸すようにしつこく求める中で、うさん臭く思われていることを察知し、真剣さを見せて職員の印象を変えなければと焦る^{あせ}気持ち。

エ 相手が間違えたと一方的に決めつけているうえに、部屋が空いている状況にもかかわらず貸そうとしない職員の態度にいきり立つ気持ち。

「問2」⁽²⁾声⁽²⁾をださずに三人で笑った。とあるが、このときの三人の様子と

して最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 職員にいやな思いをさせられたことに対し、自分なりの感情表現をそれぞれ見せ合ったことによつて、せめてもの気晴らしができている様子。

イ 職員とのやりとりで雰囲気が悪くなり、三人でけんかをしているようなそぶりを見せたものの、その行為の幼さにおかしさを感じている様子。

ウ 職員にいやな思いをさせられたことを忘れるために、自分たちの理想の行動を想像したことによつて、それぞれが気分を切り替えている様子。

エ 職員とのやりとりによつていやな思いをしたにもかかわらず、何もできなかったお互いをあえて責める仕草をして、団結力を高めている様子。

〔問3〕⁽³⁾ 結ちゃん、気にするな。あんなことなど気にするな。気にする必要なんかないぞ。ふう。わたしの中を流れていたどくどくした気持ち

ちが、ゆっくりと落ちつくところへ落ちていった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 心がかき乱されて、どのように対処すればいいのかわからなくなって
いる「わたし」の様子を、「わたし」の独り言と本心とを並立的に描き
分けることで対照的に表現している。

イ 心の中の負の感情が、大船さんの気遣いを素直に受けとめて薄らいで
いく「わたし」の様子を、受けとめた言葉と「わたし」の気持ちの変化
の描写に重ねて印象的に表現している。

ウ 心の中にある怒りを抑えようと必死になっている「わたし」の様子を、
心の中で大船さんと「わたし」が会話をしている描写と、その状況説明
を示すことで誇張して表現している。

エ 心からどうしても消えない「わたし」の怒りがくすぶり続ける様子を、
出来事を気にしないようにする「わたし」の思いをあえて繰り返し示す
ことで、反語的に表現している。

〔問4〕⁽⁴⁾ なかなか寝られなかった。とあるが、そのわけとして最も適切な
のは、次のうちではどれか。

ア 公民館での出来事を思い出すたびに大船さんや若田さんのために怒れ
なかった自分の情けなさを感じ、今後の対応方法を考えてしまうから。

イ 公民館での出来事について同じ言葉を投げかけてくるママのしつこさ
が嫌なのにその場で言えなかったため、いらだちが消えなかったから。

ウ 公民館での出来事に対するママの反応が意外だったうえに、ママの言
葉に自分がしっかりと向き合えていなかったという思いがあったから。

エ 公民館での出来事によりママとの関係が悪くなったように感じ、仲を
修復するために根本的な原因を見直すべきかもしれないと感じるから。

〔問5〕⁽⁵⁾ 両耳が聞こえますって顔をしている。とあるが、このときの「わ
たし」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 片耳が聞こえないにもかかわらず、それについて周りの人には気づか
れないようにうまく振る舞っていたと確信が持てるので、安心している。

イ 片耳が聞こえないからといって気にする必要などないはずだという思
いがあり、同情されなくて済んだ事実について、誇らしさを感じている。

ウ 片耳が聞こえないことを知られないようにしながら、受付の人と対等
に話し合おうと気を張っていた自身の健気さを思い、つらくなっている。

エ 片耳が聞こえないことをまだ受け入れることができず、大船さんたち
と立場が違うように振る舞ったことについて、自責の念にかられている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

かつては小学校卒の首相や企業の成功者がいた日本です。若者たちは立身出世を夢見て、懸命に働き、「住宅すごろく」*ゲームにも参加できました。（第一段）

しかし、現在はどうでしょう。貧困ループ*から抜け出すのは容易ではありませんでした。幼少期からの「教育格差」が、「所得格差」に続いているからです。（第二段）

さらにここ三十年余りで、日本は「自己責任」論が声高に叫ばれる国になりました。ホームレスになったのはその人が努力しなかったから。非正規雇用者が簡単にクビになり、ボーナスももらえないのは、その人が正社員になろうと努力しなかったから。ひきこもりなのは、自分が努力しないから。パート暮らしで生活が苦しいシングルマザーは、その人生を自ら選択したから。「生活保護」者は、働くのが嫌で楽をしたいから。すべて自分の「選択」の結果なのだから、仕方がない。なぜ社会に文句を言うのか——。（第三段）

しかしこれらは、はたして本当に「自分」が頑張ればどうにかできた問題ばかりなのでしょうか。（第四段）

たとえば貧しい田舎から出てきた若者が、建設現場に住み込みで働き、兄弟が継いだ実家に戻ることもできず、マイホームも持てずに老いていく場合、そこに社会の構造的課題はなかったのでしょうか。非正規雇用では社会保障や貯蓄は難しく、病気や怪我をすれば職も住まいも同時に失います。気づいたら路上で生活していたような場合、本人の自覚や努力が足り

ないと一方的に責められるものでしょうか。（第五段）

あるいは、たまたま大学卒業時に経済不況が重なった世代は、仕方なく派遣や契約社員として社会人生活をスタートします。しかし新卒一括採用が一般的な大手の日本企業が、既卒でかつ派遣しか経験してこなかった人を正社員として雇用することはほとんどありません。専門的な職業訓練を受ける機会も得られず、生涯にわたり不安定な雇用状態を余儀なくされる。そういった時代の不運も、本人の努力不足ゆえでしょうか。（第六段）

画一的な日本の学校教育では、集団生活に馴染めない子や、いじめの構造が生じやすいともいわれます。心にトラウマを抱えて学校をドロップアウトした子が、不登校からひきこもりに移行する例は、もうずいぶん前から指摘されていたことです。これらを社会問題として認知しながら具体策を打ち出さなかった社会で、その責任はひたすら当事者とその家族だけが負うべきなのでしょうか。「保育園落ちた日本死ね!!!」*の社会で、幼い子どもを抱えてシングルマザーとしてパート暮らしだった女性が、コロナで解雇されて一日一食で暮らしているのは、はたして本人の自覚が足りなかったからでしょうか。（第七段）

どんな土地に生まれるか、どんな教育レベルの親の下に生まれるか、どんな時代に生まれるか、どんな周囲の人間環境の下で育つのか、そういったあらゆる環境が物心つかない頃から私たちの言動や人生の選択に影響を与えていきます。それらを「自己責任」の一言で片づけるのは、想像力の欠如以外の何ものでもない、私は考えます。（第八段）

先日、ある人がテレビでこんなことを言っていました。（第九段）

「大学で一所懸命勉強して資格をとり、今の仕事に就けたのは自分自身の

努力の結果。ホームレスは努力しなかったから、働きたくないから路上にいる。結局、自分の努力が足りないからですよね」と。(第十段)

驚きましたが、このような認識はこの男性ばかりではないのでしょうか。

心の奥底でこう信じている人はかなり多いはずです。(第十一段)

しかし、こう想像力を働かせることもできるのではないのでしょうか。

(第十二段)

「では、自分が仮に路上生活者の下に生まれたとしたら、自分はそれでも立派な塾に通い、有名大学に進学して、勉学に専念することができたかどうか」と。(第十三段)

その方が大学に進学して成功している。その裏には、自分自身の努力以上に、その人の教育にお金をかけることに価値を見いだした親がいたからです。⁽¹⁾「勉強などしても無駄だ。それより高校を出たら働け」と強制せず、

「あなたの努力は報われる。進みたい学校に進みなさい」と背中を押して見守ってくれる家庭に生まれたという幸運が、多くの場合根底を成しているのです。現在日本にはびこる「自己責任論」を、私たちはもう一度よく考え直す時期に来ているのではないのでしょうか。(第十四段)

今から約二十五年前の1997年、私は「パラサイト・シングル」なる言葉を世の中に提示しました。成年となり、働いて独立する年齢になってもなお独り立ちせず、好んで親の元に住み続け、衣食住を親に賄ってもらっている独身者のことです。稼ぎのある人もない人も実家に寄生している構図は共通で、そのイメージを踏まえて「パラサイト・シングル」と呼んだのです。(第十五段)

当時、親同居の独身者が増加していた背景には、いくつかの要因が関係

しています。一番の理由は、若年層を中心に非正規雇用者が増えたことです。総務省の「労働力調査」によると、1984年には15・3%だった非正規雇用労働者は、2020年度の時点で38・3%にまで増加しています。

(第十六段)

ちょうど時を同じくして「ニート」「フリーター」「ハケン」という呼称も日本社会に定着しました。時は2000年代。バブル崩壊後の就職氷河期時代ともちょうど重なります。(第十七段)

バブル崩壊後の日本は1993年以降、景気が後退し始め、大手企業が一斉に新規雇用を控えるようになりました。正社員採用が見込めない若者が大勢、非正規雇用という選択を余儀なくされたのです。1986年に施行された労働者派遣法は、1996年に派遣業務の対象を26業務に拡大、1999年には派遣業種は原則自由となりました。当時のテレビで、派遣会社のCMが流れない日はないほどの全盛期に突入したのです。(第十八段)

ボーナスや昇給がなく、住宅手当も交通費も出ない。それどころか一年先、三年先の雇用もどうなっているかわからない。そんな待遇が現在では問題視されていますが、当時は「企業に縛られない、自由な生き方」という観点で、フリーターやハケンという生き方を肯定的に捉える若者も数多くいました。(第十九段)

しかし、そんな不安定な暮らしでは、将来に建設的な未来図を描けないのも当然です。貯蓄もままならない時給制では、都内でひとり暮らしするのも難しい。そうした経済的背景からも、「パラサイト・シングル」は増えていきました。(第二十段)

(2) 親の側の子に対する態度も、徐々に変化していきます。まず子どもの数自体が昭和初期頃に比べると、格段に少なくなりました。戦前のように子どもが各家庭に四人も六人もいたら、皆が寄生することは不可能です。しかし、子どもが一人や二人ならば、我が子が成長してなお親元に住み続けることは可能です。(第二十一段)

高度経済成長期を体験している親世代は、経済的余裕から塾や習い事、進学にお金をかけ、手塩にかけて子どもを育て上げました。そんな我が子が、成人後すぐに独立せず、そのまま実家暮らしを続けることは、むしろこれまで通りにあれこれ世話することができる喜びに通じるのかもしれない。(第二十二段)

(3) しかし、ここで強調しておきたいのは、「パラサイト・シングル」が可能だったのは、先に述べた「住宅すごろく」ゲームが機能していたからという点です。子どもが非正規雇用で「住宅すごろく」を進めなくても、親はまだすごろくを順調に進んでマイホームを手に入れていた世代です。成人がもう一人くらい住み続けても、経済的、空間的にさほど支障がない自宅を持っている。その現実が「パラサイト・シングル」を可能にしていたのです。(第二十三段)

昨今、その事情も明らかに変化しました。2000年頃に成人し、非正規雇用で人生をスタートし、そのまま不安定な生活を続けていた世代が、2021年現在、子を持つ親の年齢になっています。急激な少子化の背後には、非正規雇用者が急増している社会状況もあります。順調に貯蓄がでないどころか、翌年の就労の見込みも立たない人が、子どもを何人も持つとうと考えられるでしょうか。あるいは、「パラサイト・シングル」を続

けてきた人が、親があらゆる面倒を見てくれる快適さを捨てて配偶者を得て独立するリスクを、いまさら求めるものでしょうか。答えは自然に見えてきます。(第二十四段)

(山田昌弘「新型格差社会」による)

〔注〕「住宅すごろく」ゲーム

—— 幼い頃は〈実家〉に暮らし、10代後半からは〈下宿〉や〈アパート〉暮らし、20代後半で結婚し、〈社宅〉や〈賃貸〉マンションなどに住み、30代で夢の〈戸建て〉マイホーム〉を手に入れてゴールという、約30年前の一般的なサラリーマンがたどる定型人生ルートのこと。当時は、このルートを目指して努力すれば、基本的に皆、最終ゴールまでたどり着けた。

貧困ループ—— 世代を超えて貧困が受け継がれること。

ドロップアウト—— 離脱。学校における中途退学。

「保育園落ちた日本死ね!!!」

—— 保育所に子供を入所させる「保活」に苦しむ母親の激しい怒りを訴えたブログのタイトル。

「ニート」「フリーター」「ハケン」

—— 「ニート」(Not in Employment, Education or Training) は15〜34歳の未婚で、職業訓練、就学、家事や家業の手伝いもせず、働く意志を見せない人。
「フリーター」(フリーアルバイター) は15〜34歳ま

での学生と主婦を除く若者のうち、正社員以外で働く人と、働く意志はあるが無職の人。「ハケン」は雇用契約を派遣先ではなく派遣事業者と結んでいる派遣労働者のこと。

〔問1〕 この文章の構成における第八段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた苦しい生活状況の具体例をふまえて、明確に筆者の見解を示すことで、「自己責任論」の再考を促す契機としている。

イ それまでに述べてきた苦しい生活状況の具体例に対して、「自己責任論」という新たな問題に目を向けることで、話題の転換を図っている。

ウ それまでに述べてきた苦しい生活状況の具体例を受けて、順序立てて整理することで、「自己責任論」の長所と短所の説明へと導いている。

エ それまでに述べてきた苦しい生活状況の具体例について、「自己責任論」が生じる背景を説明することで、問題の所在を明らかにしている。

〔問2〕⁽¹⁾ 「勉強などしても無駄だ。それより高校を出たら働け」と強制せず、「あなたの努力は報われる。進みたい学校に進みなさい」と背中を押して見守ってくれる家庭に生まれたという幸運が、多くの場合根底を成しているのです。とあるが、「背中を押して見守ってくれる家庭に生まれたという幸運が、多くの場合根底を成している」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 自分が現在置かれた状況は努力の結果であり、努力が足りないと結果も伴わないという人の考え方は、家庭環境が育んだものだということ。

イ 大学に進学した人が成功するという社会は、努力は報われるという考えの家庭が多くを占めている状況によって生み出されたということ。

ウ 自分が仮に路上生活者の下に生まれたら勉学に専念することができていたのかと想像力が働く人は、恵まれた家庭環境にいたということ。

エ 大学に進学した人の成功は、その方向へ進んでいくことについて家庭環境が妨げにならないという前提があって成り立っているということ。

〔問3〕⁽²⁾ 親の側の子に対する態度も、徐々に変化していきます。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 暮らしが不安定な状況の中、「パラサイト・シングル」にならないように、自分の子どもを手塩にかけて育てていくようになったということ。

イ 各家庭に子どもが多かった頃よりも、親が一人一人の面倒を入念に見る中で、「パラサイト・シングル」を受け入れやすくなったということ。

ウ 子どもの数が少なくなってきたことで、「パラサイト・シングル」のように、親も子どもの世話になろうと意識するようになったということ。

エ 高度経済成長期を体験して余裕ができ、自分の子どもが「パラサイト・シングル」にならないだけで喜びを感じるようになったということ。

〔問4〕⁽³⁾ しかし、ここで強調しておきたいのは、「パラサイト・シングル」が可能だったのは、先に述べた「住宅すごろく」ゲームが機能していたからという点です。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 親がマイホームを手に入れていて、子どもが親の年齢になってからでも自分と同じ生活を次の世代にさせ続けることができると考えたから。

イ 子どもと共に住んでも経済的、空間的に支障がない自宅を持つことが

当たり前で、生活の不安定さが解消される社会になったと考えたから。

ウ 非正規雇用者が急増していて、建設的な未来図を描けない現代の社会構造の下では、子どもを持つことすら難しくなっていると考えたから。

エ 順調に貯蓄ができないどころか、翌年の就労の見込みすら立たない状況でも、配偶者を得て独立しようとする人が増えていると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「社会における自己責任論」

というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあ

なたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。

なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞ

れ字数に数えよ。

5

次のAは、松尾芭蕉まつお ばしやうの俳句とその鑑賞文であり、Bは、松尾芭蕉の俳句について述べた「去来抄」きやうしやうの一節である。また、あとの内
の文章は、Bの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に
答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

A

行春ゆくはるを近江*あふみの人とおしみける

芭蕉はいつごろからか、近江おうみ（滋賀県）という地に安らぎを感じるよう
になりました。

元禄二年（一六八九）、四十六歳の春、かねて念願の奥州おうしゅう（東北地方）
への旅を思い立ちました。旅にでる直前、住みなれた江戸の芭蕉庵あんをひと
にゆずってしまいました。奥州から北陸地方をまわって大垣へ、さらに伊
勢せから故郷伊賀上野に着いたとき、季節はもう冬になっていました。いち
ど京都・大津に出かけて、なじみの人びととの再会を喜んだようです。そ
のまま故郷にもどらないで、近江の膳所ぜんぜで新年を迎えました。

一月三日になってようやく伊賀の家に帰っていきました。さすがにふる
さとはくつろいだようで、しばらく地元の俳句仲間とさかんに句会を楽
しみました。その後、三月下旬にはふたたび膳所へと足を運び、近江の春
を満喫しました。そこでできたのがこの一句です。

陰暦（旧暦）では、春は一月から三月です。「行春」とは晩春、つまり
三月のことになります。たしかに、いかにも春も終わりといった季節感が
あります。一句の意味は、むずかしくありません。晩春の近江の風情ふうせいを、
土地の人びとといつくしみながら過ごしたことです、といった意味になり
ます。

(1) じつは、前書まえがき（詩歌の前においたことば）をそえたかたちのものも伝わっています。この句をおさめた句集『猿蓑さるみの』には、「望湖水惜春」（湖水を望んで春を惜む）という前書がそえられています。これだと、さきに読んだような理解でいおう問題ないでしょう。しかし、芭蕉が自筆でしたためた、この句の前書のなかには、これとは異なるかたちのものがみられます。たとえばこんな前書です。

志賀辛崎からさきに舟をうかべて、人々春の名残なごりをいひけるに

志賀は滋賀、近江の国のことです。辛崎は松で有名な名所。琵琶湖びわこに舟を漕こぎだして、みなと春の過ぎ去るのを惜しみつつ楽しんだという情景が、いっそうはつきりうかび上がってきます。ことは遣いも全体の意味も、ほとんど抵抗なく読めるでしょう。さらに、たんに春の風景を満喫したというだけでなく、舟遊びを現地の人びととともにしたという臨場感がきわだちます。元禄三年の行く春を、親しい近江の人たちといっしょに堪能たんのうしました、ということです。

(2) ところがです、そこは芭蕉のこと、それでわかった気になっては、あまりに表面的すぎます。注意すべき事柄がいくつかあります。

まず俳句の表現についてみます。この句に、俳句に必要とされる切字きれじ（言い切りの語）はありません。切字といえは、「ぞ」「なむ（なん）」「や」「か」「けり」「かな」といった助詞や助動詞をさすことが多いのですが、命令形や終止形、ときには名詞がその役割をすることもあります。「閑しずかさや岩にしみ入蟬いるせみの声」は、「や」が切字、「さみだれをあつめて早し最上もがみ川がわ」は、形容詞の終止形「早し」が切字の効果を發揮しています。

けれども、「行春を」の句にはそれらしき文字はみあたりません。かりに終止形の「おしみけり」となっていれば、なんの問題ありません。そこを「ける」と連体形で止めたために、ピシツとしたかたちではなく、どこか締まらない終わりがたにみえてしまうのです。じつはこの句、当初は、上五かみご（最初の五文字のこと）が「行春や」となっていました。「や」とあればさし障りさわりはありません。⁽³⁾ところがのちに、芭蕉は「行春を」と置き換えたのです。下五しもご「ける」はそのままです。となると一句から切字が消えてしまいます。もちろん承知のうえで、芭蕉はあえて切字をはずしたのです。切字論にはさまざまな説があり、切字がないと俳句として失格とはかならずしもいえません。ただここでは、いわば寝た子を起すようなやりかたで、わざと切字をとっぱらったのです。作者として、それなりのねらいがあったにちがいません。

芭蕉本人はなにも語っていません。想像の域をでませんが、切字なしにしたわけを考えてみましょう。「や」にしても、「けり」にしても、そこでいったん文脈を切り、詠嘆の情をもたらすことになります。「行春や」と「や」があることにより、春の終わりを迎えるという一文と、以下の近江の人びとと惜しんだという一文が、別物になります。^{*}「二物取り合わせ」といいますが、よくある俳句のよみかたです。すでにお話したように、芭蕉もはじめはこのかたちをとっていました。ところが、『猿蓑』という本に掲載する段になって、「行春を」にしたのです。確信犯的改変です。ならば、下五を「おしみけり」とすれば問題は生じず、実際その句形も伝わっています。それでもやはり、「行春を近江の人とおしみける」が、芭蕉の決定稿と考えられます。

切字なしのかたちで『猿蓑』に収めたのは、文を完結させる言い切り型をさけたということになります。それは、ひと言でいうと、余韻です。余情といってもかまいません。春の名残をおしむ気持ち、親交をかさねた近江の仲間との友愛のこころ、こうしたいつまでも永久につづいてほしい心情を、「や」や「けり」によって断絶してしまいたくないのです。あえて切字をはずした要因ではないでしょうか。

(藤田真一「俳句のきた道」による)

B 行春を近江の人とをしみけり 芭蕉

先師いは曰く「尚白しやうはくが難がたに、近江（4）は丹波（4）にも、行春（4）は行歳（4）にもふるべしといへり。汝なんぢいかが聞き侍はべるや」。去来（4）曰く「尚白（4）が難がたあたらず。湖水（4）朦朧（4）として春ををしむに便たよりあるべし。殊（4）に今日（4）の上に侍るに」と申す。先師曰く「しかり。古人（4）もこの国に春を愛する事、をさ（4）をさ都（4）におとらざる物を」。去来曰く「この一言心に徹す。行歳近江に給たまはば、いかでかこの感まします。行春丹波にいまさば、もとよりこの情（4）うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、真なるかな」と申す。先師曰く「汝は去来、共に風雅をかたるべきものなり」と、殊更（4）に悦よろこび給ひけり。

(向井去来「去来抄」による)

行春を近江の人とをしみけり 芭蕉

先師が言われるには「この句を尚白が非難して、近江は丹波にも、行春（晩春）は行歳（過ぎ去ってゆく年）にも代えられると言ったが、

お前はどうか」と。私は「尚白の非難は不当です。近江とあるのは、琵琶湖の水辺がぼんやりと霞み、いかにも惜春の情にふさわしいからでしょう。ことにそれは実感を表したものです」と答えた。先師は「その通りだ。古人もこの国で春を惜しむのは、なかなか都にもおとらないのだ」と言われた。私は「その言葉には深く感じ入りました。行歳を近江におられたら、どうして年の暮れゆくのを惜しむ感がありました。また行春を丹波におられたら、もとより惜春の情は浮かばないでしょう。まことに山水の景趣は人を感動させるものですね」と申しあげた。先師は「去来よ、お前は共に風雅（俳諧）を語るに足る者である」と、たいそう喜ばれた。

〔注〕 近江——現在の滋賀県。「近江」の文字は浜名湖のある遠江

（遠つ淡海〈淡水湖〉）に対して、琵琶湖のある近江（近つ淡海）と称したもの。

二物取り合わせ——二つの素材・事物を配合させて一句にまとめる作句法。「行春や」の場合は二つの素材・事物、「行春を」の場合は一つの素材・事物になる。

先師——亡くなった師匠・先生。芭蕉を指す。

尚白——江左尚白。芭蕉の門下生で大津の医者。

丹波——現在の京都府中部と兵庫県東部にまたがる地域。ほとんが丹波高地とよばれる山地から成る。

去来——向井去来。芭蕉の門下生。

古人——昔の人。先人。

〔問1〕⁽¹⁾ じつは、前書まえがき（詩歌の前においたことば）をそえたかたちのものも伝わっています。とあるが、鑑賞文の筆者が「前書」について述べている内容として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 「望湖水惜春」という「前書」によつて、俳句はむしろかしいものではないということがわかり、どのように解釈しても問題ないと感じられる。

イ 「望湖水惜春」という「前書」によつて、俳句の情景が実際に存在するとわかり、句としては問題がないということを確認することができる。

ウ 「志賀辛崎に……」という「前書」によつて、俳句に示されていない詳しい情報を得ることができ、その場の様子をつかみやすくなっている。

エ 「志賀辛崎に……」という「前書」によつて、俳句で表現されているものとは異なる情景を想像でき、様々な場面を想像し得る句だとわかる。

〔問2〕⁽²⁾ ところがです、そこは芭蕉のこと、それでわかった気になつては、あまりに表面的すぎます。とあるが、このように述べた鑑賞文の筆者の考えとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた俳句の解釈を受けて、異なる視点による解釈の仕方に導くことにより、俳句に込めた芭蕉の真意に迫ろうとしている。

イ それまでに述べてきた俳句の解釈に基づいて、異なる俳句と比較することにより、芭蕉が無意識に行つた表現の工夫に触れようとしている。

ウ それまでに述べてきた俳句の解釈を踏まえ、対立的な解釈の一つとして、俳句そのものから芭蕉の真意に迫る方法を提示しようとしている。

エ それまでに述べてきた俳句の解釈について、正しいのかどうかを確認

するために、俳句の表現に着目しつつ詳しい分析をしようとしている。

〔問3〕⁽³⁾ ところがのちに、芭蕉は「行春を」と置き換えたのです。下五しもご

「ける」はそのままです。とあるが、芭蕉は何のためにそのようにしたと筆者は考えているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 切字がないと俳句として失格とはかならずしもいえない中、切字なしにしたわけを考えさせ、切字論のさまざまな説に着目させるため。

イ 春の終わりを迎えようとしているという状況と、その状況を近江の人びとと惜しんだという状況を二つの別の話のように表現するため。

ウ 「二物取り合わせ」というよくある俳句のよみかたではない形式のものを、『猿蓑』という本に掲載することができるようになるため。

エ 春が過ぎ去ることを惜しむ思いや、その思いを共有することができた仲間との友愛が途切れないでほしいという気持ちを表現するため。

〔問4〕⁽⁴⁾ 近江は丹波にも、行春は行歳としにもふるべしといへり。汝なんぢいかか聞き侍るやはべとあるが、Bの文章から、芭蕉が「近江」をどのような土地だととらえていることがわかるか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 丹波や都にもたとえられるさまざまな顔を持つ場所。

イ 春先から年の暮れまでいたいと思わせるような場所。

ウ 昔の人が惜春の歌を詠むような景色のすぐれた場所。

エ 春を惜しむ心を持つ人の多さが都におとらない場所。

〔問5〕 Bの中の——を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えよ。

第 3 回

(11月)

テスト 時 間	50 分
平均点 (都標準)	57 点

問題番号			正答率
1	(1)		96.4
	(2)		40.3
	(3)		98.9
	(4)		91.5
	(5)		90.0
2	(1)		57.2
	(2)		80.4
	(3)		75.9
	(4)		51.5
	(5)		34.0

問題番号			正答率
3	〔問 1 〕		67.1
	〔問 2 〕		74.5
	〔問 3 〕		89.4
	〔問 4 〕		39.0
	〔問 5 〕		51.5
4	〔問 1 〕		62.9
	〔問 2 〕		26.8
	〔問 3 〕		63.4
	〔問 4 〕		37.5
	〔問 5 〕		3.9点

問題番号			正答率
5	〔問 1 〕		68.6
	〔問 2 〕		73.6
	〔問 3 〕		34.5
	〔問 4 〕		38.6
	〔問 5 〕		33.7

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 新記録に迫る勢いだ。
- (2) 精緻な分析結果を提示する。
- (3) 万策尽きてお手上げとなる。
- (4) 収穫した稲の束を脱穀する。
- (5) 戦争のない平穏な時代を望む。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 桜の花もサカリを過ぎた。
- (2) この問題は私にはニが重い。
- (3) コショウした車を修理に出す。
- (4) 優勝した選手をシユクフクする。
- (5) 孔子の思想のコンカンを理解する。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

「わたし」（里中羽衣子）と兄の「道」は、二人で祖父の残したガラス工房を継ぎ、ガラスの骨壺をつくっている。先週、西尾さんという女性から骨壺の依頼があり、今日、西尾さんが打ち合わせのために店を訪れた。

骨壺のオーダーはたいてい業務提携している斎場からまわってくるが、まれに直接工房に問い合わせをしてくる人もいる。この西尾さんのように、「きれいな、とても」

骨壺といっても、お墓の下におさめるものではない。自宅に置いて供養するためのものだ。はじめてのお客さんは、まだ若い娘さんに先立たれた女性だった。

「おしゃれなもの、かわいいものが大好きな娘でした」とその人は話してくれた。あの子があんなあじけない陶器の骨壺に入るなんて、なんだかわいそうで、と。

「これはぜんぶ、あなたがつくったの？」

西尾さんが振り返り、窓から入ってくる日光をまともにくらったのか、きゅつと目を細める。

「ぜんぶではないです」

西尾さんが「きれい」「これもすてき」と手にとる骨壺は、どれもわたしが手がけたものではなかった。

(1) いつものことだ。もう、とうに慣れている。慣れているはずだと自分に言い聞かせるたび、肋骨を針で突かれるような痛みを覚える。

「そうだった、ご家族でやってらっしゃるのよね？ 制作はおふたりで？」

里中道。里中羽衣子。工房のサイトには、わたしたちの名前が並んでいる。

「そうなんです。ふたり一組でやる作業が多いので、きょうだいで一緒にやっています」

(2) 西尾さんの手の中におさまる大きさの骨壺。青と白がまじりあった模様

は空のようでも、波打ち際ぎわのようでもある。色ガラスを砕き、溶かして吹いてみるまで、どのような模様が出るかはわからない。どんなに切実に願いながら吹き竿さおに息を送っても、わたしの生み出す模様は祖父や兄のそれよりは美しくない。技術の差以上のものをいつも感じる。

ドアが開いて、西尾さんがそちらを見た。わたしも同じように顔を向けて「うわっ」と声が出る。兄の道が、泥まみれで立っていた。

「あんた、なにしてんの？」

そう叫んだ時、わたしは西尾さんの存在を完全に忘れてしまっていた。

道は「歩いてて、転んだ」と、肩をすくめている。今日はたしか枚方*ひらかたの繁

実硝子製作所みガラスに行っていたはずだった。繁實さんのところへ行った帰りに、

舗装されていない道で転び、水たまりに倒れたのだという。短く切った髪

にからんだ泥が白く乾いてかたまっている。Tシャツの前面に泥がべった

りはりついていて、描かれているロゴが読めない。道はいつも前面に大き

く絵やロゴが入った服を着ている。服を着る時いつも間違えてしまうから、

それを避けるために前後がわかりやすい服を買うのだ。

「待って、そのかっこうで電車に乗って帰ってきたってこと？」

「うん。着替え持ってへんし」

「恥」にたいする、致命的な感覚のずれ。道とわたしが相容あひいれない原因は、そこにある。兄が店に入ってこようとするので、叫んで止めた。

(3) 「お風呂入ってきてよ！ あほちゃう？」

道の言動をむやみに否定してはいけない。これまでに、母から何度もその注意を受けた。でも、どうしても耐えられない時がある。

「こんにちは」

わたしに怒鳴られ、おびえたように目をしばたたかせつつも、道は西尾さんに向かって頭を下げている。

西尾さんは泥だらけの道を驚いたように見つめていたが、「あ、こんにちは」と小さな声で挨拶を返した。道の視線が西尾さんが新たに手にした骨壺に落ちる。赤や白や黄色、そして緑の色ガラスの模様は、野放図*に咲く草花を連想させる。茎を伸ばし、葉を広げ、太陽に向かって咲き、風にそよぐ。そんな光景が浮かぶような粗野な美しさのある壺だ。

「こんなきれいなものに骨を入れるなんて、なんだかふしぎですね」

(4) こんにちはと言ったきり黙っている道に、西尾さんが話しかけた。何年もこの仕事をしているのに、道はこんなふうになんか平気でお客さんに気を遣わせる。

「入れるのは骨だけじゃないんです」

道が答えた。不必要に大きな声だった。声のボリュームの調節がへたなのだ。

「え？」

「ここに来る人はみんな、骨そのものよりそこにおさめておきたいものが

あります」

西尾さんは当惑したように首を傾^{かし}げている。へんなやつ、と思っているのかもしれない。わたしの商売人としての勘が、「これ以上会話を続けさせるべきではない」と判断した。

「もうええから、お風呂入ってきて」

道は「うん、うん」とのろのろ^{うなず}頷き、しょんぼりとうなだれてドアを閉めた。

自宅は店と工房の裏にある。父も母も健在だが、母は東京での仕事が多く、大阪にはめったに帰らない。父はわたしが子どもの頃に家を出ていった。

「さっきの人、もしかして弟さん？ よく似ていらっしゃる」

ショックだった。「弟さん」も「よく似てらっしゃる」も、どちらもひどい。道はわたしより五歳も上だ。いくらぼんやりしていて実年齢より若く見えるといっても、弟はない。それに、今まで「似ている」なんて言われたことは一度もない。

「似てないですよ……あと、あの人はいつもああなので、気にしないでください」

転んだ。階段を踏み外した。よそみをしていて壁に激突した。川に落ちた。いつものことだ。「道は身体のかいかたがうまくない」と祖父が嘆いていたが、いまだにその意味がわからない。だって自分の身体なのに。歩くとか階段を降りるとか、そんなの誰もがふつうにやっていることなのに。⁽⁵⁾和ませるつもりで兄の失敗の数々を話したが、西尾さんは笑わなかった。

「骨壺は、あの人につくってほしいです」

西尾さんはドアをじっと見ている。そうやって待っていれば道がまた戻ってくると期待しているみたいに。

こらえよう、と思う前にため息がこぼれた。やっぱり、と言ってしまうそうになる。

道には目には見えないしるしがついている。この人は他の人間とは違います、というしるし。わたしにはついていない、しるしだ。

(寺地はるな「ガラスの海を渡る舟」による)

〔注〕 骨壺^{こつぽ}——遺骨を入れる壺。

オーダー——注文。

斎場——葬儀を行う場所。

サイト——インターネット上のホームページや各種コンテンツ。

ウェブサイト。

枚方^{ひらかた}——大阪府北東部の市。

野放図——規則などに縛られず思うままに振る舞うこと。

「問1」⁽¹⁾ いつものことだ。とあるが、このときの「わたし」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 兄の作品のほうが客に選ばれることには慣れているものの、技術のうえではそれほど差はないはずだと自負しており、不満に思う気持ち。

イ 兄の作品のほうが客にとって魅力的なものであるのは、現在の技術の差からみてどうしようもないことなので、仕方がないと諦める気持ち。

ウ 兄の作品のほうが自分の作品よりも客の心を引きつけることは理解しているが、その事実を受け止めることが難しく、やりきれない気持ち。

エ 兄の作品と自分の作品にはどちらも異なる良い味があるのに、客がいづも兄の作品ばかりを選ぶ理由を知りたいという気持ち。

「問2」⁽²⁾ 西尾さんの手の中におさまる大きさの骨壺。青と白がまじりあった模様は空のようでも、波打ち際ぎわのようでもある。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 小ぶりのガラスの器の繊細さと二つの色が作り出す鮮やかなイメージを、比喻を交えて感性豊かに表現している。

イ 手に取ってこそわかるガラスの器の質感と、そこに表れている模様の視覚的な美しさを幻想的に表現している。

ウ 手の中におさまるガラスの器の貧弱さと、明るい二つの色が感じさせる豪華さとを対照させて表現している。

エ 二つの色の作る広大な光景が、小さなガラスの器に与える存在感を、体言止めで余韻をもたせて表現している。

「問3」⁽³⁾ 「お風呂ふろ入ってきてよ！ あほちゃう？」とあるが、この表現が

ら読み取れる「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 客が店にいるときに乱暴な言葉を使うのははばかれるのだが、兄には曖昧な物言いでは指示が伝わらないので、あえて怒鳴っている様子。

イ 思わぬ災難に遭った兄に同情しつつ、とりあえず客のいる状況で何をすべきかを伝えようと、わかりやすい言葉で指示を出している様子。

ウ 「恥」にたいする感覚を兄に持つてもらうためには、客が店にいる今の状況がふさわしいと思い、意識的に乱暴な言葉を使っている様子。

エ 兄が自分の今の状態を気にならず普段どおりの行動をとることに耐えられず、目の前の客の存在も忘れて乱暴な言葉で制止している様子。

「問4」⁽⁴⁾ こんにちはと言ったきり黙っている道に、西尾さんが話しかけたとあるが、この表現から読み取れる西尾さんの気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 作り手である道の視線から、手に取った骨壺の感想を求められていることを察したので、何かしら言葉を掛けねばと焦るあせ気持ち。

イ 客の目の前で道が一方的に怒鳴られているのを見て、骨壺についての感想を話すことで気分を和らげてやろうと気遣う気持ち。

ウ 自分が手にしている骨壺に道の視線が注がれているのを感じ、二人のめめ事を中断して場の雰囲気を変えてやろうとする気持ち。

エ 客の存在を忘れてやり取りをしている道と羽衣子に対し、話題を骨壺のほうに戻すことで客の立場をはっきり示そうとする気持ち。

「問5」⁽⁵⁾ 和ませるつもりで兄の失敗の数々を話したが、西尾さんは笑わなかった。とあるが、「西尾さんは笑わなかった」わけとして最も適

切なのは、次のうちではどれか。

ア　いくら客を和ませるためとはいえ、怒鳴られてしょんぼり出て行った道の失敗を話題にするというのはひどい仕打ちのように感じたから。

イ　羽衣子が場を和ませるために話した道の失敗談に全く関心が持てないほどに、美しい骨壺を作り出す道という人物に強く引かれているから。

ウ　客のいる前で怒鳴るような態度をとっておきながら、今さらのように道の失敗談で兄妹の仲の良さをアピールする態度が鼻についたから。

エ　考えられないような失敗をする人間であるからこそ、一方でこのような美しい骨壺を作る能力を持つのだということがわかっていたから。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

*^{どうた}

淘汰の厳しさを表すのに、淘汰圧という言葉がよく使われます。淘汰圧は厳密に定義できる量ではありませんが、淘汰の厳しさを「圧力」という物理量にたとえて表した言葉で、直感的にわかりやすいのでよく使われます。⁽¹⁾淘汰圧が強ければ、よりよく適応した個体だけが子孫を残すことができ

き、遺伝子を厳しく選別することになります。遺伝子は一定の確率で突然変異を起こしますが、ほとんどの突然変異は生きるために不利な変化をもたらすので、強い淘汰圧のもとでは変異遺伝子は確実に排除されます。もし淘汰圧が弱ければ、多くの変異遺伝子が長く生き残るので、繰り返し突然変異が起これば、変異を受けていない遺伝子の割合が少なくなって、純粋な種の性質が失われていきます。ですから、種の性質が変化せずに長い間生き続けるためには、大きな淘汰圧が不可欠です。生きた化石といわれたシーラカンスなどは、一億五千万年以上もほとんど形を変えずに生き続けた種ですが、進化しなかったからといって淘汰圧がかからなかったわけではなく、むしろ強い淘汰圧があったからこそ、それほどの長い期間、突然変異で現れた変異遺伝子がすべて排除されて、昔と同じ遺伝子が生き続けることができたわけです。（第一段）

⁽²⁾

生存競争という言葉がよく使われるので、生物はいつも食うか食われるかの争いをしていると思われるかもしれません。確かに、自然の生態系の中では大きな淘汰圧によって、つねに生存に不利な遺伝子が排除されるように淘汰されなければ種の性質を保つことはできないのです。しかし、生存競争はスポーツ競技のようにいつも同じルールで競い合うわけではあり

ません。むしろ、生き方の知恵くらべです。実際、適応の仕方にはいろいろあり、必ずしも強い者が勝つのではなく、各個体は弱くても、大きな集団の中でつねにある割合が生き残るなら子孫は存続しますから、遺伝子にとっては強い個体が必ずしも有利だというわけではありません。（第二段）

実際、適応のしかたにはいろいろあります。同じ生き方をするものが競い合い、その環境に最もよく適応したものが子孫を残すという場合があります。その場合、環境に適応する手段、例えば獲物を捕らえるのに有利な形態や感覚・運動機能が進化することが考えられます。一方、違う生き方を身につけることによって、他の種との競合を避けて生き残るという方策もあります。コウモリは超音波によるエコーロケーション^{*}の機能を獲得し、鳥が活動できない日没後に活動する生き方を可能にしました。そのように、機能の高度化とともに、生き方の多様化という方策は、適応の切り札といってもよいでしょう。人の生き方にも、他人と競う生き方と、他人と違う道を模索する生き方がありますが、どちらも生物の適応の常套手段^{じょうどう}です。（第三段）

機能の高度化にしても多様化にしても、世代を重ねていけばどこかで限界に到達します。ことに、機能の高度化においては、新たな方策が導入されない限り、それ以上進化しようがないという極限に到達します。スポーツ競技でも、同じルールで競い合う限り、だんだん記録の伸びがにぶり、限界に近づいていきます。記録の到達点は、すべての感覚や運動機能を最大限に訓練して、最適な条件で働かせたときに実現できるレベルです。しかし、スポーツの場合は、決まったルールの種目で競い合いながら人間が進化したわけではないので、人間の身体が必ずしもそれぞれの種目に最適

なようには作られてはいません。ところが、生物の進化の到達点は、おかれた環境の制約条件の中で身体や生き方を進化させた結果として到達した極限ですから、到達点の身体の構造、機能あるいは生態は、環境の制約条件における最適な設計となっていると考えられます。もし身体のどこかに生きるために役立たない部分があれば、それを持たなくても同じように生きられるわけですから、それだけの物質やエネルギーを浪費しているわけで、余計な部分を持たない個体と争えば不利になり、強い淘汰圧がかかれば淘汰されると考えられます。(中略)(第四段)

以前には、科学は「なぜか」という問いに答えるのではなく、「いかに」という問いに答えるのだと教えられました。⁽³⁾しかし、生物の性質を理解しようとするとき、「なぜか」という問いが大切であることが認識されるようになってきました。「なぜネコの爪が曲がっているのか」という問いに、「ネズミを捕るため」と答えるのは、進化生物学的に見れば正当な答えです。「ネズミを捕るため」というのは、ネズミを捕食する生き方を続けるうちに、爪の形態がネズミを捕るのに適した形に進化したという意味です。もちろん、ネズミを捕るのに適したように設計者が曲がった爪を設計してネコに与えたわけではありませんが、爪の形態の進化は、優秀な設計者が設計したのと同じ極限の最適設計に到達したのです。したがって、機械の設計者に、機械の細部について、なぜこのような設計になっているのかを問えば必ず理由を説明できるように、生物の性質についてもなぜそうなっているのかを説明できるはずなのです。(第五段)

ただし、最適設計ということはあくまでその性質が進化した環境にあったので、環境が変われば最適ではなくなってしまうこともあって当然

です。自然の環境でネズミを捕食していたネコも、人間に飼われてペットフードしか与えられなくなれば、もはや曲がった爪の効用はなくなります。しかし、爪の形は遺伝的性質であり、突然変異の確率は人間の歴史程度の時間スケールにおいてはごく小さいので、遺伝的性質はほとんどそのまま継承され、過去の環境に適応した性質の痕跡を長く持ち続けているのです。

(第六段)

人間の性質についても、なぜそのような性質を持っているのかを問うことができませんが、人間の場合は人間が出現した当時の環境において効用があったという説明でなければなりません。今日のように発展した文明社会においては、人間の性質によっては生きるための効用がないどころか、かえってさまざまな不都合を生ずることが起こっても不思議ではありません。(第七段)

動物の行動についても同様に、「なぜか」を問うことができます。動物の生態の観察ではさまざまな不思議な行動が見られますが、形態の最適設計と同様に、どんな行動にも必ず適応方策としての意味があり、子孫を残すことにどのように貢献しているのか説明できると考えられています。動物の行動を適応方策として理解しようとする立場は、^{*}コンラート・ローレンツによって学問領域として確立され、動物行動学(エソロジー)と呼ばれています。動物行動学においては、さまざまな動物の生態の詳細にわたる観察により、一見気まぐれのような行動にもすべて「なぜそうなのか」の理由があり、多くの行動について種の存続に貢献していることが示されています。(第八段)

人間の行動も、動物行動学の対象とすることができ、ヒューマン・エソ

ロジ—という言葉も使われます。例えば、ローレンツの最も重要な著書といわれる「攻撃」の中で、攻撃性という行動の特徴をとりあげ、動物の生態に攻撃性の起源があり、人間が進化した環境においても攻撃性が必要であったことを指摘しています。しかし、今日の文明社会の中では、遺伝的性質がもはや生存に有利な性質ではなく、むしろ人類の存続を危うくする要因になることも考えられます。(第九段)

(戸川達男「動物の生き方 人間の生き方」による)

〔注〕 淘汰——ここでは「生物集団で、生存競争の結果、環境に適応できる者が生き残り、不適応のものが滅びる現象」のこと。

エコーロケーション——動物が音や超音波を発し、その反響によって、物体の距離、方向、大きさなどを知ること。

コンラート・ローレンツ——一九〇三—一九八九。オーストリアの動物行動学者。近代動物行動学を確立した。

〔問1〕⁽¹⁾ 淘汰圧が強ければ、よりよく適応した個体だけが子孫を残すことができ、遺伝子を厳しく選別することになります。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 種にとって、環境などの条件の厳しさに左右されない変異遺伝子を受け継いでいくことが、生き残っていく手段になるということ。

イ 種をとりまく環境などの条件が絶え間なく変化している場合、生存に

不利な遺伝子は、条件に適応して変えられていくということ。

ウ 種が生き残るためには、環境などの条件が厳しくなったときに、遺伝子の突然変異によって適応する必要があるということ。

エ 種にとって環境などの条件が厳しければ厳しいほど、生きるために有利な遺伝子を持つものが生き残っていくということ。

〔問2〕⁽²⁾ 生存競争という言葉がよく使われるので、生物はいつも食うか食われるかの争いをしていると思われるかもしれませんが、とあるが、筆者がそのように述べた意図として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア ある条件下で不利になる遺伝子を持っていると、競争に敗れ生き残れないと思うかもしれないが、別の機能を身につけ生き残る場合もあると示すため。

イ ある条件に適応する手段があれば生き残れると思うかもしれないが、条件が変われば不利になるので、同じ条件での競争に意味がない場合もあると示すため。

ウ 個として弱い遺伝子を持つものは生き残れないと思うかもしれないが、同種の大きな集団の中で生存が保証されれば適応していける場合もあると示すため。

エ 生存に有利な形態や感覚・運動機能などが、環境に適応して最適になるまでに進化した種があれば、競争することの意味がなくなる場合があると示すため。

〔問3〕⁽³⁾ しかし、生物の性質を理解しようとするとき、「なぜか」という問いが大切であることが認識されるようになってきました。とある

が、「生物の性質を理解しようとするとき、『なぜか』という問いが大切である」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 生物の性質は、その生物が最も長く生存してきた環境に適するようにできているので、なぜその環境が適していたかを考察すればよいから。

イ 生物の性質は、環境によって変化していくものなので、現在の環境がなぜその生物の生存にとって最適であるのかを考察すればよいから。

ウ 生物の性質は、ある環境の中での目的を達成するためのものなので、なぜその目的をもつようになってきたのかを考察すればよいから。

エ 生物の性質は、その生物の生存にとって最適になるように進化した結果と考えられるので、なぜそこに至ったのかを考察すればよいから。

〔問4〕 この文章の構成における第八段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第七段までの説明に対して、その内容とは異なる観点から新たな問題を提起することによって、論の方向の転換を図っている。

イ 第七段までの説明に関して、その内容に適した具体的な事例を提示することによって、論をわかりやすくするための補足をしている。

ウ 第七段までの説明を受けて、その内容から導き出せる新たな視点から問題をとらえ直すことによって、論をより深めている。

エ 第七段までの説明について、その内容の中心となる事柄を取りあげ、更に詳しく解説することによって、趣旨を明確にしている。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「他人と競う生き方と、他人と違う道を模索する生き方」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞

も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、
、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文のあとの
は、本文中の『三冊子』原文Aの現代語訳である。（*印の付いている
言葉には、本文のあとに「注」がある。）

俳句というものは、言葉と言葉が響き合うことによって、直接そこに説明されていないことまでも読者に感じ取らせようとする。この響き合いから生まれた意味の広がりには、優れた句であればあるほど、どこまでも広がっていく。それはすでに十七文字というような数量的な制限を超越した広がり方である。こうした広がりを作り出すことが俳句作者の苦心するところであるし、この広がりをごとまで追いかけることができるかが俳句鑑賞者の楽しみということになろう。

それでは、このような意味の広がりを作り出すための効果的な方法として、どのようなことが考えられるだろうか。

『三冊子』の「わすれみづ」（くろさうし）には、次のようにある。

A 発句の事は、行きて帰る心の味也。たとへば、「山里は万歳遅し梅の花」といふ類也。「山里は万歳おそし」といひはなして、梅は咲けりと
いふ心のごとくに、行きてかへるの心、発句也。山里は万歳の遅しといふ斗の一重は平句の位也。先師も「発句はとり合せ物と知るべし」と言へるよし、或る俳書にもはべる也。

『三冊子』は、芭蕉の門人の服部土芳が書いたものである。土芳は若いときから芭蕉に接し、伊賀蕉門の中心的存在であったから、芭蕉から直接

教示を受ける機会も多かった。篤実な人柄の土芳は芭蕉の教えを忠実に書きとめようとしていたのであって、上の「行きて帰る心の味」というのも、芭蕉の言葉とは特にことわっていないが、芭蕉の口から出たものである可能性が高い。「山里は万歳遅し梅の花」という芭蕉の句は、元禄四年（芭蕉四十八歳）正月、伊賀上野において作られた。芭蕉が伊賀の俳人たちに、この句を例にとつて、発句のあり方を説明し、それを、伊賀の人間である土芳が『三冊子』に書きとめたということは十分考えられる。

土芳はここで、「発句はとり合せ物と知るべし」という芭蕉の言葉を引いている。発句は、言葉と言葉とをうまく取り合わせることによって作られる。言葉と言葉をうまく取り合わせるとは、言うまでもなく、言葉と言葉とが大きく響き合うように取り合わせることである。しかし、ただ、取り合わせというだけでは、どのようなものをどのように取り合わせるのか、よく分からない。その具体的な説明が「行きて帰る心の味」ということであり、その実例が「山里は……」の句なのである。

B 山里は万歳遅し梅の花 芭蕉

この句は「山里は万歳遅し」と「梅の花」との二つの部分から成り立っている。そして、「山里は万歳遅し」というだけならば、それは一重構造にすぎず、平句（連句における発句・脇・第三・挙句以外の句）にあたるものだと『三冊子』の文中で説明されている。つまり、「行き」だけで、「帰り」がないということになる。

万歳とは、新年に各家々を回って賀詞を述べ舞を演じる芸人である。都

ならばそうした芸人は年が明けるとすぐに回って来るのだが、これらの芸人は都から周辺の町へ、それから田舎へというように回って行くので、山里ともなると年が明けてからもしばらくは万歳が回って来ないのだ。「山里は万歳遅し」とはそういったことを表現しているのだが、これだけでは単なる叙述にすぎない。発句というものは単なる叙述に終わってしまっただけではないのであって、それが意味的に大きな広がりを持つようにしなければならぬ。つまり、「山里は万歳遅し」を何かと取り合わせ、その両者の間で響き合いが生じるようにしなければならないのである。そのためには、「山里は万歳遅し」という「行き」に対して、「帰り」になるようなものを取り合わせなければならない。この場合、「梅の花」が「帰り」になる。

(2) 「行き」と「帰り」というのは、そこに表現されたそれぞれの内容の方向性が同一でないということだろう。「山里は万歳遅し」といひはなして、梅は咲けりといふ心のごとくに、行きてかへるの心」と『三冊子』にはある。「山里は万歳遅し」と言っておいて、これに響き合わせるものとして、「万歳が来るのが遅いのと同様に、梅の花が咲くのも遅い」という意味内容の言葉を付け加えるのならば、ここにある二つの表現内容は同じ方向を向いていることになり、「行きて帰る」ことにはならない。ここは、「梅の花は咲いている」と言っているのである。山里に万歳が回って来るのは遅い、しかし、梅の花はよそと変わることなく咲いているというのだ。これによって、「山里は万歳遅し」と「梅の花」とが別々の方向性を有することになる。

俳句においては、その中に併存する二つの要素が、意味内容において、

別々の方向性を持っているということは大切だ。二つのものが同一の方向性を有していれば、結局それは繰り返しにすぎないのであって、言わんとすることの意味は強められるかもしれないが、意味の広がりには生じない。方向性の違う二つのものが響き合うからこそ、その間の空間にさまざまな意味が生まれ、その句の表現内容に奥行きが生じてくるのである。

「山里は万歳遅し梅の花」にしても、万歳の回って来るのが遅い山里というところから、世間から忘れ去られてしまったようなのかな静けさがまぶず感じられる。しかし、これだけでは、こののどかな静けさの中に動きが感じられない。世間から忘れ去られたまま動きをとめてしまった山里という印象になる。ところが、そこへ「梅の花は咲いている」というもうひとつの要因が加わるため、この山里に生命の息吹いぶきが生じる。梅の花はよその土地と同じように咲いているのであって、それは山里を点々と彩いろどっており、その香りは山里の家々を包み込んでいるのである。このように、梅の花という生命をひとたび感じ取ると、この山里からは他にもさまざまな生命の息吹きを感じ取れることになる。芽を吹き始めようとする草木、牛や鶏の鳴き声、さらには人間の生活の営みまでもが感じ取れるのであって、「梅の花」が付け加わったことにより、こののどかな落ち着いた山里が生きたものとなったのである。

この句がこれだけの意味の広がりを持つことができたのは、方向性の違う二つの要素を響き合わせたからである。「山里は万歳の回って来るのが遅い」「そして、梅の花の咲くのも遅い」というように、同じ方向を向いている二つの要素を組み合わせたならば、この山里は静かに眠ったままになってしまい、平板な叙述にすぎなくなってしまう。

「発句の事は、行きて帰る心の味也」という『三冊子』の言葉は、俳句の作り方について、きわめて重要な鍵を与えてくれているのである。

(大輪靖宏「芭蕉俳句の試み」による)

発句というものは、「行きて帰る心」が大切だ。例えば「山里は万歳遅し梅の花」などがそれに当たる。始めに「山里は万歳遅し」と言っておいて、(けれども)「梅は咲いている」と続けるような妙味が「行きて帰るの心」のある発句だ。山里は万歳遅しというだけの単純な構造では、平句としかいえない。芭蕉先生も「発句は、とり合わせが大事と知っておくべきだ」と言われたと、ある俳句論の本にもある。

〔注〕 発句——連句(複数の人が同席し、五・七・五と七・七の句を

順に詠んでいく形で、普通三十六句からなる)における最初の五・七・五の句。単に「俳句」の別称としても用いられる。

平句——連句において重要な発句・脇句(二番目の七・七)・

第三(三番目の五・七・五)・挙句(最後の七・七)以外の句の呼称。

門人——ある先生のもとで教えを受けている人。門下生。

賀詞——祝意を表す言葉。

〔問1〕——を付けたア・エの単語のうち、他と性質・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕 Aの中の〃〃〃を付けたア・エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と同じ書き表し方のものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問3〕⁽¹⁾ 行きて帰る心の味 とあるが、Bの俳句で「行き」に当たる内容として最も適切なのは、次のうちではどれか。

A 新年に各家々を回る万歳の芸人が、人の多い都から始めるのは当然で、遅くなってもこんな山里にまでよく来てくれることだ。

I 新年に各家々を回る万歳の芸人が、この山里まで回ってくる時からして、そこが都からはるかに遠い地だと知れることだ。

ウ 新年に各家々を回る万歳の芸人がやってくるのが遅いのをみると、世間から忘れられた山里の静けさが感じられることだ。

E 新年に各家々を回る万歳の芸人がこの山里にやってくるのは、梅の花と同じように新年をとくに過ぎたところであることだ。

〔問4〕⁽²⁾ 「行き」と「帰り」というのは、そこに表現されたそれぞれの内容の方向性が同一でないということだろう。とあるが、「そこに表現されたそれぞれの内容の方向性が同一でない」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

A 世間から忘れ去られ動きのない山里と、都と変わらず咲く梅の花に象徴される自然と人の生命の営みとで方向が異なること。

I 俗世から離れた山里のたたずまいと、梅の花が都よりも似つかわしく咲く自然に囲まれた地のすばらしさとで方向が異なること。

ウ 万歳のやってくるのが遅い山里の状況と、梅の花が早く咲き豊かな生命の息吹きが感じられるという点で方向が異なること。

E 山里に万歳がくるのが遅いのは当然であることと、梅の花までがそれ

に合わせて咲くのは惜しいという点で方向が異なること。

〔問5〕 この文章のテーマである「行きて帰る心の味」に沿った俳句として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 五月雨を^{さみだれ}あつめて^{もみがは}早し最上川

イ ほろほろと山吹^{やまぶき}散るか滝の音

ウ 山路^{やまぢ}来て何やらゆかしすみれ草

エ 名月や池をめぐりて夜^よもすがら

第 4 回
(12月)

テスト 時 間	50 分
平均点 (都標準)	62 点

問題番号			正答率
1	(1)		94.5
	(2)		92.1
	(3)		46.2
	(4)		67.0
	(5)		88.2
2	(1)		40.2
	(2)		76.2
	(3)		72.2
	(4)		92.2
	(5)		73.1
問題番号			正答率
3	〔問 1〕		96.0
	〔問 2〕		75.2
	〔問 3〕		85.7
	〔問 4〕		81.2
	〔問 5〕		93.7
4	〔問 1〕		22.4
	〔問 2〕		54.2
	〔問 3〕		45.0
	〔問 4〕		52.7
	〔問 5〕		3.7点
問題番号			正答率
5	〔問 1〕		39.4
	〔問 2〕		40.7
	〔問 3〕		53.6
	〔問 4〕		68.6
	〔問 5〕		48.0

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 疎遠そえんになっていった友人と再会することができた。
- (2) しばらくは優勝の喜びに浸ひたっていたい。
- (3) いよいよ雌雄しゆうを決するときがきた。
- (4) 経費は参加者の寄付だけで賄まわう。
- (5) 身心の鍛錬たんれんを欠かさない。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 全国各地の神社ブツカクぶつかくを巡る。
- (2) 過去の経験にモトづいて忠告する。
- (3) 戦国時代のブショウぶしょうに興味を持った。
- (4) 昨夜からのハゲはげしい雨で河川が増水した。
- (5) ゾウキぞうきの移植を待つ重症患者は増加しつつある。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

義治は妻の真知子の一周忌のため、小学三年生である息子の健太郎とともに、墓がある妻の実家の室蘭むろらんにいた。妻を亡なくした悲しみで、健太郎が眠った後に涙を流すことが多くなっていた義治は、一周忌の夜、義理の弟夫婦（隆司と千鶴）に、健太郎を養子にほしいと言われたことで怒りをあらわにする。その晩、寢床に入ってから、健太郎の幸福を考えると、義理の弟夫婦に任せるべきかもしれないという思いも浮かび、父親としての存在意義まで疑い、苦悩する。

「にいさん、もう寝ましたか？」

健太郎と客間の布団ふとんに入ってしまった頃、ふすまの向こうから、隆司の声がした。健太郎はもう、眠っている。義治はどうしようかな、と迷ったが、「いいや、まだだよ」と布団を出て、ふすまを開けた。

「さっきはすみませんでした」

「いいんだよ、別に」

「千鶴もにいさんに謝りたいって。健太郎が起きちゃうといけないから、ちよっと下までいいですか？」

「ああ。いいよ」

隆司について、階下のリビングに降りると、千鶴がお茶を淹いれてくれた。「ありがとう」と湯飲みを受け取り、義治が口をつけるかつかないかのうちに、千鶴は両ひざに手をついて、「おにいさん、すみませんでした」と頭を下げた。

「謝ることなんてないよ。隆司君から聞いた時は、いきなりだったから、ちよっと取り乱してしまったけれど、冷静になってみれば、君たちの考えもわかるような気がする。僕の考えが、ある種の感情論に過ぎないことも

ね」

(1) 「おにいさん、感情論だなんて、そんなこと……」

「そうですよ、にいさんが怒るのは、当然です。酒の勢いを借りて僕ら夫婦の勝手な希望を、そのままにいさんにおつけてしまったんですから。千鶴にもさっき、怒られちゃいましたね。あまりにも失礼だって」

「失礼だとは感じなかったよ。驚いただけさ。だって、君たちがそんなことを考えているだなんて、思ってもみなかったから」

「すみませんでした。これからにもいさん、今までと同じように、親戚づきあいを続けてもらえませんか？　僕がにいさんに失礼なことをしたせいで、にいさんがもうここへ来てくれなくなったたら、両親に申し訳ができません。なにしろ、おやじとおふくろにとって健太郎は、たった一人の孫ですから」

血のつながりとは面倒なものだな、と義治は改めて思った。そもそも、隆司が健太郎を養子にしたいというのも、血のつながりの問題なのだし、真知子の両親が健太郎に特別な感情を抱くのも、血のつながりがあるからだ。

そんなに血のつながりって、大切なものなのか。

なんてことを口にしようとして、義治は矛盾に気がついた。自分が健太郎と暮らしているのも、自分が健太郎にとって、生物学上の親であるから、すなわち、血がつながっているからだ。そして、同じく血がつながっている真知子の両親や隆司に対して、なんだか優位にあるような気がしているのも、血のつながりが深いからだ。

血のつながりによって、自分はなんとか健太郎の父親として扱っても

らっているだけなのだ、義治はふとそんなことを考えて、情けないような気持ちになった。血のつながりだけで、父親だなんて威張っていいじゃない。もっと親としてしつかりせねば。

真知子の一周忌が終わった。これが一つの区切りになるかと、義治は思っていたが、実際はまだまだ、迷いの途中にある。だが義治は、その迷いを受け止めて、歩き続けねばならない。

「とにかく、僕はもう寝るよ。健太郎のことは、もう一度よく考えてみる。僕と二人で暮らしてゆくことが、本当に一番いいことなのか、僕にもわからなくなってしまうんだ」

「おにいさん、そのことはもう忘れてください。この人と私が、勝手に夢のようなことを話してただけなんですから」

「そうですよ。健太郎の気持ちも考えないで、健太郎がうちの子になってくれたらいいな、なんて、二人で話してただけなんですよ」

(2) 「もういいよ。君たちの気持ちはわかった」

義治は二階の客間に戻って布団に入り、隣で寝ている健太郎の顔を見つめた。かわいい顔をしている。だが、かわいい顔をしているからこそ、余計に今の状況が不憫であるように感じられる。この、かわいい顔の奥に隠されている悲しみに、向き合ってやることすらできなかった、不甲斐ない自分。小さな胸の中にあることを、察してやろうともしなかった、身勝手な自分。

健太郎にとっては、真知子と義治の三人で暮らしてゆくことが、おそらく一番いいことであつたはずである。また、もし真知子の代わりに義治がいなくなり、真知子と二人で暮らしてゆくことができたのなら、そのほう

が随分とマシであったはずである。健太郎はもう、どうしたって、一番いい環境で育つてゆくことはできない⁽³⁾。どうするのが一番マシなのか、という、あきらめや妥協にまみれた選択をするしかないのだ。

義治は、それからしばらく眠れなかった。そのうちに涙が出てきて、そこに嗚咽^{おえつ}が加わった。健太郎が起きてしまうといけない、そう思い、頭から布団をかぶったが、どんどん大きくなってゆく嗚咽のせいで、やがて健太郎が目を覚ましてしまった。

「おとうさん、泣いてるの？」

「そうだよ。ごめんな、みつともないだろ？ 恥ずかしいよ」

「仕方ないよ。今日はおかあさんの一周忌なんだもん。そりゃ悲しいよね」

「でもそれは、健太郎も同じだろう？」

「うん。でもきつとおとうさんのほうが悲しいはずだよ。だっておかあさんとは大学生の時に知り合ったんでしょ？ おとうさんは僕よりずっと長い時間、おかあさんと一緒に過ごしたんだもんね」

「健太郎、おまえも泣いていいんだぞ」

「僕は泣かないよ。あのね、おかあさんの病院にお見舞いに行ったときにね、おとうさんはやさしい人だけど、寂しがり屋さんだから、あなたがしっかり支えてあげてね、って頼まれたんだ。だから、僕は泣かない。おとうさんを支えてあげなきゃならないから」

「おまえは強いんだな」

「うん、強いよ。おかあさんがいないのは悲しいけれど、力を合わせて頑張ろうね。大丈夫だよ、おとうさん。僕がついているから」

義治はもう、ただただ、泣いた。ああ、真知子、真知子、真知子。君は亡くなる前に、健太郎の心のケアまで済ませてくれていたんだね。それだけじゃなく、君がいなくなった後の僕のことまで、健太郎に頼んでおいてくれたんだね。⁽⁴⁾ どうして君は、そんなにすごいんだ。どうしてそんなにやさしいんだ。どうしてそんなに頭がいいんだ。どうしてそんなに責任感が強いんだ。どうして君はそんなに、完璧なんだ。

「そうだな。頑張らないとな」

義治は健太郎の頭をなでると、「おやすみ」と言って、また布団に潜り込んだ。それからしばらく、声を殺して泣いていたが、もう義治の心に迷いはなかった。

健太郎と二人で、暮らしてゆく。

そんな決意を今さらしている自分を、義治は恥じた。迷うことなんて、初めからなかったのだ。

⁽⁵⁾ この、弱虫め！ 優柔不断な、臆病者め！

（広小路尚祈「少年と父」による）

「問1」⁽¹⁾ 「おにいさん、感情論だなんて、そんなこと……」とあるが、こ

のときの千鶴の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 義治と健太郎のために思って提案したことについて、理不尽な怒りを買ってしまったため、義治とどう接すればよいか思索している様子。

イ 自分たちのわがままに対して怒って当然のはずなのに、自身に非があるように気を遣ってくれている義治に対して、戸惑い恐縮する様子。

ウ 謝ることを拒否され、自分たちのしたことについて義治が想像以上に

怒っていると感じて、その場の収め方がわからなくなっている様子。

工 義治が感情的になっていて、落ち着いて話し合うことができるような状態ではないことがわかり、隆司の助けを借りようとしている様子。

〔問2〕⁽²⁾「もういいよ。君たちの気持ちはわかった」 とあるが、義治がどのように言ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 健太郎のことをもう一度考えるところ、その件は本当にあきらめたという思いを二人が伝えてくれたので、安心できたから。

イ 二人に預けることについて本気で考えようとしていたのに、健太郎と暮らすことをあきらめるような発言をしてきて、拍子抜けしたから。

ウ あきらめたふりを見せつつ、健太郎と一緒に暮らしたいという思いを再度それとなく伝えようとする二人の様子にあきれてしまったから。

エ 健太郎を二人に預けるという選択肢も消すことができない状態で、結論を出すことはしないまま一旦この日の話を終えたいと思ったから。

〔問3〕⁽³⁾ どうするのが一番マシなのか、という、あきらめや妥協にまみれた選択をするしかないのだ。とあるが、このときの義治の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 健太郎が置かれている立場のつらさを思いやり、真知子がいらない以上状況はよくなるならないということに対するやりきれなさを感じている。

イ 健太郎のこれからの人生を考えて困難な道を歩むことになることを予感し、状況は変えられないのだから開き直るしかないと感じている。

ウ 健太郎とともに歩んでいく日々を意識し、健太郎のために生きなければならぬ自分の人生がよいものにはならないだろうと感じている。

エ 健太郎にとって何が一番いいことなのかを考えても仕方がないので、

健太郎自身がしっかりしていくしかないのだと客観的に感じている。

〔問4〕⁽⁴⁾ どうして君は、そんなにすごいんだ。どうしてそんなにやさしいんだ。どうしてそんなに頭がいいんだ。どうしてそんなに責任感が強いんだ。どうして君はそんなに、完璧なんだ。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 真知子の行動を改めて認識し、自分にはまねできないと感じる部分を感じ浮かべる義治の様子を、言葉を並記して対句的に表現している。

イ 真知子を思ううちに、かつて抱いた疑問を思い出す義治の様子を、同じ語句の繰り返しとたとえを用いることで、躍動的に表現している。

ウ 真知子について知らない事実が次々に出てきて困惑する義治の様子を、知りたいことに対し疑問を投げかける形で、誇張して表現している。

エ 真知子の存在の大きさを痛感している義治の様子を、心の中で真知子に呼びかける形で褒め言葉を並べることで、印象的に表現している。

〔問5〕⁽⁵⁾ この、弱虫め！ 優柔不断な、臆病者め！ とあるが、このときの義治の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 健太郎と二人で暮らしていく決意を固めることができ、それまで踏ん切りがつかなかった原因を見つめ、二人の欠点を消そうとしている様子。

イ 真知子がいらない中、健太郎と共に暮らしていかなければならない状況を受け入れきれず、自分自身をなじることで心の痛みを感じている様子。

ウ 家族のことを思う真知子と健太郎の思いに触れる中で、父親としての覚悟が足りなかったことに気づいて、自分自身を奮い立たせている様子。

エ 強くなった健太郎を頼もしく感じる一方、共に暮らしていく自分自身の弱さをつきつけられ、真知子に鼓舞されている感覚を覚えている様子。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

唐突に聞こえるかもしれないが、こんな「問い」から始めたいと思う。

（第一段）

お金が大好きで、お金を儲けることにしか興味が無く、無駄な出費は一切しない。利益にならない友人とは付き合わず、責任は極力他人に押し付ける。人には厳しく、相手を押しのけてでも自分を主張する。もしも、こんな人間が、あなたの周囲にいたとしたら、あなたはこうするだろうか。

（第二段）

私なら、できれば彼を避けて通りたいと思うだろう。彼とはなるべく付き合いたくないと思うだろうし、彼から何か頼まれたとしても、何か体の良い理由を見つけてお断りするだろう。間違っても一緒に飲もうなんていう気はおこさないはずだ。彼を説得して、この世にはお金以外の価値もあるのだということを判^{わか}らせようなどと思うのは無謀なことだ。彼は、おそらくお金というものに執着するあまり、お金こそが人生の指標であるかのように思っている強度の金銭^{*}フエチであり、なりふり構わぬ上昇志向の持ち主である。つまりは人間としてのバランスを欠いた病的な人格の持ち主だと言うほかはないからである。彼に必要なのは説得ではなく、彼自身が自分の選択は結局は引き合わなかったと、人生のどこかで自覚することである。いや、運よく財産と快適な生活を手に入れて、一族郎党に見守られ、幸福のうちに一生を終えるかもしれない。そういうこともあるだろう（そうなるという確率はあまり高いとは思えないのだが）。（第三段）

現代の多くの人々が彼の生き方に共感を覚えたとしても、それはその人

たちの自由である。また、彼が、お金だけを人生の価値であると思い込んで、裏切りと貯蓄にこそしむ生活を選ぶのも、彼の自由であり、誰もそれを公然と非難する権利もない。罪を犯さない限り、彼は市民社会の善良な一員であり、いかなる権力も、彼の選択を力で曲げることはできない。

（第四段）

それでも、私は、できれば彼のような人間が自分の周囲には現れて欲しくないと思ふだろう。彼が自分の生き方について、どのような考え方を持つかは、彼の自由であると同時に、私が彼とは係わらないでいたいと思うのも、私の自由だからだ。しかし、彼が病んでいると考えることは、私の自由とは言えない。彼だけが病んでいて私は健康であると言える権利を私は持つてはいないからである。⁽¹⁾この場合、病とはあくまでも相対的なものだ。場合によっては彼のほうが健康で、病んでいるのは私のほうだということもありうる。（第五段）

しかし、大切なのはどちらが健康で、どちらが病んでいるかということを見定めることではない。誤診や試行錯誤を繰り返しながら、病というものに対する耐性を身につけることなのだ。あるいは、病の効用といったものを見つけ出すことである。飲酒も喫煙も依存症の人間にとっては確かに害悪であるが、それらに過剰反応してパージ^{*}する世界もまた一つの病と言ふべきだろう。双方に求められているのは節度であり、全体として求められているのは少しずつの前進である。現実的に考えるとはそういうことだと思う。（第六段）

不思議なことだが、法人^{*}という法律上に定められた人格に限って言うならば、ほとんどの法人は、あたかも生得^{*}の気質のように、上述した金銭

フェチである、彼のような性格を最初から持っている。さらに不思議なのは、誰も、この法人というものの病的な性格に関して、根本的な疑いをさしはさむことがないということだ。しかも、私たちはこの法人（株式会社）というものと係わらずに生活するわけにはいかない。私たちは、私病的と考える組織の中で、人生の多くの時間を過ごすことを宿命付けられている。これは、どう考えたらよいのだろう。今や、世界を駆動する最も重要な牽引力である会社が、実は先天的に病んでいて、私たちはそこに縛り付けられている。少なくとも、株主資本主義^{*}といった観点で、会社を捉えんとするならば、かくあるべしという会社の肖像は、限りなく、金銭フェチである前述の彼が持っている性格と似かよったものになる。（第七段）

そんなことはない、会社もまた人々が望む商品やサービスを社会に提供しており、雇用を確保して人々の生活に寄与しているとの反論があるかもしれない。確かに、そうである。しかし、それもどこかで利益として返ってくる^{*}と信じているからこそ社会と和解しようと試みていえると言える。とはいえ、リーマン・ショック後の大手企業のなりふり構わぬリストラは、それ以前の終身雇用、一人も首を切らないといった美風を、いとも簡単にかなぐり捨てたのである。会社とは、どこかで必ず自己の保身のために、人間を裏切る存在だと思っただ方がよい。⁽²⁾それにもかかわらず、ひとは会社そのものの存在について疑いを持たない。（第八段）

仮に、これとは反対の性格の会社というものを思い描いてみればよいかもしれない。お金に執着心無く、困っているものがあれば無駄と分かっているにもかかわらず、貧窮しているものがあれば、救いの手を差し

伸べる。他人の責任を自分の責任のように背負い、人には優しく、いつも控え目でありのままの現実を受け入れる。さて、これが会社だったとして、果たして、こんな会社に投資しようなどと思う投資家がいるだろうか。慈善家か、よほどの酔狂^{*}でないかぎり、こんな会社に投資をしても、回収の見込みはないと誰もが思うに違いない。むしろ、どこまでも貪欲で、競争相手を叩き潰すほどのパワーがあり、ちよつとした隙間があればそこに入り込んで金儲けのチャンスを広げ、自社のリスクに関しては二重三重に対策を講じる用心深さを持ち、自信に満ちた自己を演出できるような会社こそが、投資家にとっては魅力的なのではないだろうか。（第九段）

⁽³⁾だとすれば、株式会社とは、私たちが社会のメンバーとしては禁止されている自分勝手な横暴を合法的に成し遂げる、私たちの強欲が作り出した化身ということになる。そこに、株式会社というものを、原理的に考えてゆく^{*}端緒がある。（第十段）

（平川克美「株式会社の世界史」による）

〔注〕 金銭フェチ——この場合は、金銭に対して異常な執着を示す人を指す。

パージ——追放。

法人——会社や団体など、法律上で一人の人間と同じように権利や義務を認められている組織体。

生得——生まれながらにしてそういう性質を持っていること。

株主資本主義——株主利益の追求を最優先とする考え方。利益追求のための人員削減や、市場での規制緩和の働きかけなどが肯定される。

リーマン・ショック——米国の大手投資銀行・証券会社リーマン・ブラザーズの経営破綻とその副次的な影響により世界の金融市場と経済が危機に直面した一連の出来事。

リストラ——restructuring（リストラクチャリング）の略。

日本では、会社が従業員を解雇する意味に使われている。

酔狂——好奇心から人と異なる行動をとること。物好きなこと。

端緒——物事の始まり。いとぐち。手がかり。

〔問1〕⁽¹⁾ この場合、病とはあくまでも相対的なものだ。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 金銭に執着する人を病んでいると筆者が認識する場合、逆に金銭に執着する人の側は筆者のことを病んでいると認識するものだということ。

イ 金銭に執着することによって健康な状態になるのか病んでいる状態になるのかはわからず、第三者がその人を見守る必要があるということ。

ウ 金銭に執着している人を病んでいると考えるのは極端であり、そのような考えを持つ人の方が病んでいると思われるのが当然だということ。

エ 金銭に執着して人間としてのバランスを欠く人を正当化する見方が広く認められる場合、その人を病んでいるとは言えなくなるということ。

〔問2〕 この文章の構成における第六段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた考えを受けて、必要な姿勢を整理することで、

続く話題においても前提として認識しておくべき点を明確にしている。

イ それまでに述べてきた考えに関して、それに反対する立場から対照的な事例を示すことで、どちらがより正しい考え方なのか検証している。

ウ それまでに述べてきた考えについて、筆者自身の体験をもとにしながら根拠となる事例を挙げていくことで、自説の妥当性を強調している。

エ それまでに述べてきた考えをふまえ、問題が発生する原因となっている事柄を複数示すことで、問題解決の糸口を見つける契機にしている。

〔問3〕⁽²⁾ それにもかかわらず、ひとは会社そのものの存在について疑いを持たない。とあるが、「ひとは会社そのものの存在について疑いを持たない」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 利益を求めず商品やサービスを社会に提供して生活に寄与するのが本来の会社であるのに、人々はそこを目指さなくなっているということ。

イ 多くの会社が先天的に病んでいて利益に執着している状況の中、人々は当然のように会社に身を置き多くの時間を過ごしているということ。

ウ 商品やサービスを提供し、雇用を確保して生活に寄与している中、人々は利益が会社に返ってくるのが当然だと認識しているということ。

エ リーマン・ショックのようなことが起こるだけで会社は危機に陥っていくものなのに、人々は会社が存続していくと信じているということ。

〔問4〕⁽³⁾ だとすれば、株式会社とは、私たちが社会のメンバーとしては禁止されている自分勝手な横暴を合法的に成し遂げる、私たちの強欲が作り出した化身ということになる。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 他人の責任を自分の責任のように背負っていた人が、いつのまにか貪欲に金儲けのチャンスを狙う会社を作り出すようになるを考えるから。

イ お金に執着心無く、困っているものがいれば手を差し伸べる人がいたことにより、それに甘えて貪欲になる会社が生まれたと考えるから。

ウ 他人に優しさを見せるような、個人では歓迎される性質を会社が持つことをよしとせずに、人々は会社に競争力を求めてきたと考えるから。

エ 投資をしても回収の見込みがないと思うような会社を叩き潰した会社が魅力的だとされたことで、自分勝手な人が多くなったと考えるから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「会社の性格」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。「なども、それぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

旅夜書懷

杜甫

細草微風岸

細草 微風の岸

危檣独夜舟

危檣 独夜の舟

(1) 星垂平野闊

星垂れて平野闊く

月湧大江流

月湧いて大江流る

名豈文章著

名は豈に文章もて著れんや

官応老病休

官は応に老病にて休むべし

飄飄何所似

飄飄 何の似たる所ぞ

天地一沙鷗

天地の一沙鷗

《通釈》

細い草がかすかな風にそよぐこの岸边、帆柱が高くそびえる舟で、私はひとり、眠れぬ夜を過ごしている。星は広々とした平野に垂れるように輝き、月影は水面に湧いて、きらめきながら長江は流れる。名声は文学などによって表れるものではないし、官吏としての勤めも、老いた病の身では望めない。漂泊のこの身はいったい何に似ているのだろう、天地を飛び回る一羽の砂浜のかもめのようなものだ。

中西 この詩はちょっとしたことが目立って、実景があまり鮮烈にイメージとして表れてこない、そういう感じがありませんか。特に「名は豈に文章もて著れんや、官は応に老病にて休むべし」というあたり。名声は文学なんかで表れるものじゃない、だけど官職も病気で辞めなく

てはいけない。これは実景じゃなくて、抽象的な考えですよ。『飄何の似たる所ぞ』もそうです。この詩は、そういう観念性が強いように感じます。

石川 そうですね。景色の描き方も、観念的なところが多い。例えば最初の「細草微風の岸」。細かい草が岸辺で揺れているという描写ですが、「細」という字を効かせようとしている。この字は「微」という字と関連して、細微なものイメージを生む。次は「危檣独夜の舟」。「危檣」は高い帆柱という意味ですが、その「危」と「独」。景色を描きながら、これらの字を出すことによって一つの心理を描こうという狙いがあるんです。⁽²⁾ですから、景色は二の次といっていいです。

中西 今、おっしゃったように、ことば遣いは練⁽³⁾られていると思うんです。だけど、何かことばでねじ伏せようとしているような感じがしませんか。

石川 なるほどね。杜甫の作品には、はっきりと情景を描いたものもあるんだけど、この作品の景色の描き方は、ことばの使い方の方に重点がありますね。

中西 そういう意味で、杜甫はやはりエリートで、自負も強くて、生活では囚⁽⁴⁾われたり、家族と離れたたり、さまざまな経験をしましたけど、それを肉体を持って生きていったというのじゃなくて、志で生きたとか精神で生きたとかというふうな感じがします。まさに中国人の「詩は志なり」といったようなところでは、非常に優れた詩は書いているんですけども、やっぱりポエジー^{*}ということからいいますと、やや弱いところがあると思います。ただ、この詩を読んで「星垂れて平野闊

く、月湧いて大江流る」という、この一聯^{*いっれん}はすごいなと思いました。星が垂れるというのは、「星が降るような」っていうでしょう。だから平野全体に星が降るようにキラキラしている夜空をいつているのかなと思ったんです。それから、大江から月が湧く、こんない方をした詩人はほかに何人いるんでしょうか。すごい表現だと思いました。垂れるということと、湧くということ。この上下運動の関係があって、満天の星とか平野の広がりとか、月さえも湧かせるような大きな流れ。もう具体的な解説は無駄ですよ。地球規模で川というものをとらえている。これはすごいなという気がしたんです。

石川 ⁽⁴⁾これよりちょっと後に作った「登高^{とうこう}」という詩に、「無辺^{*}の落木蕭蕭^{しょうしょう}として下り、不尽の長江^{ちやうかう}滾滾^{こんこん}として来たる」というのがあるんです。これもやっぱり地球規模かな。さらに後に作られた「岳陽楼に登る」では、「呉楚^{*ごそ}東南に坼^さけ、乾坤^{けんこん}日夜浮かぶ」。「呉楚^{*}は、江南あたりを指す古名、「乾坤」というのは天地、あらゆるものという意味で、ものすごいスケールの大きさです。

中西 その規模の大きさは、杜甫の持ち味ですか。

石川 持ち味だと思います。杜甫の五十四歳の作品と五十六歳の作品と五十七歳の作品とを、今、私は挙げただけだけでも、これらには関連があることに、今、気が付きました。

中西 その年齢ぐらいのときに、彼は地球規模の視野を持っていたということですね。

石川 そうです。詩人としての杜甫の完成、その皮切り⁽⁵⁾が「旅夜書懷」にあるといえるでしょう。ただ、この「星垂れて平野闊く、月湧いて

大江流る」という対句に関して申しますと、これは実景ではないんです。私はこの作品の作られた忠州^{*}へ行ったことがあるんですが、平野なんて、ないんです。

中西　するとこれも頭の中の広がりですね。

石川　そうですね。詩の世界です。しかも、この対句は、李白^{りはく}の作品から出ているんです。李白が若いときに、長江を下って平野へ出た、そのときにうたった詩というのが、「山は平野に随^{したが}って尽き、江は大荒に入りて流る」。山が高かったのが、平野になるにしたがってなくなってくる。そして大きな荒野がパースと広がっている。李白の若いときの作品です。杜甫は、それが頭にほっと浮かんで、この対句を作ったと思うんです。

中西　それは、知識ですね。そういう観念的なものを、自然の具体的なイメージと非常に上手に重ねる習慣が、中国の詩人にはあるんでしょうか。

石川　それはテクニクとして重要なんです。生でやるんじゃない、うまく溶け込ませるようなテクニクですよ。

（「石川忠久 中西進の漢詩歓談」による）

〔注〕 詩は志なり——詩とは自分の考えを述べるものだ、の意味。

ポエジー——詩。詩情。

一聯^{いちれん}——律詩は二句ずつの構成になっていて、その二句を一聯という。

無辺の落木：——「どこまでも続く木々はもの寂しく葉を落とし、尽きることのない長江はこんこんと流れ

る」

呉楚^{ごそ} 東南に坼^さけ：——「呉と楚、二つの国は洞庭湖で東南に分けられ、太陽と月（あるいは、天と地あらゆるもの、の意）を昼と夜代わる代わるに湖面に浮かべる」

江南——長江の南部の総称。

忠州——現在の重慶市中部の忠県のこと。

山は平野に随^{したが}って尽き：——「山は平野が現れるに従ってなくなり、長江は大荒（果てしない平野）の中を流れてゆく」

〔問1〕⁽¹⁾ 星垂平野闊／月湧大江流 とあるが、これについての対談内容の

説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア エリートであり、自負も強い杜甫の精神が表れてはいるものの、ポエジーという部分で評価するとやや弱いところがある表現となっている。

イ 広がりのある景色になっていて、ほかの詩人では表せないのはもちろん、杜甫が後に作るどの詩よりもスケールの大きな表現となっている。

ウ 視界に捉えた景色ではなく先人の作品から着想を得たイメージを表したものであり、杜甫の持ち味と言える規模の大きな表現となっている。

エ 頭に浮かんだ先人の詩の表現方法に、実際の景色をあてはめたことによつて、杜甫に備わる地球規模の視野が感じられる表現となっている。

〔問2〕⁽²⁾ ですから、景色は二の次といっています。とあるが、「景色は二の次」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 景色ではなく抽象的な考えが表されていて、ことば遣いを工夫することによって、杜甫自身の心理状態を描こうとしているということ。

イ ことばが生むイメージによって心理を描こうとしたものであり、目の前に広がる景色についてはあとの部分に描かれているということ。

ウ 観念的な描かれ方になっていて、ことばでねじ伏せるために、景色の次にことばのイメージを重要視したものになっているということ。

エ 景色が描かれている部分ではあるものの、杜甫の意識は用いることばに向いていて、景色そのものに重きを置いてはいないということ。

〔問3〕⁽³⁾ れ⁽³⁾ と同じ意味・用法の「れ」を含むものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 先生によく叱られる。 イ 弟はどこでも行かれる。

ウ 祖父が思い出される。 エ 明日お客様が話される。

〔問4〕⁽⁴⁾ 石川⁽⁴⁾さんの発言のこの対談における役割を説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 杜甫の表現方法の特徴についての中西さんの指摘を受けて、それをいったん受け止めながら、新たな視点から自説を展開している。

イ 杜甫の詩は観念性が強いという中西さんの見解を受けて、具体例を挙げながら中西さんとの考え方の相違を明らかにしようとしている。

ウ 杜甫の詩はことばが目立っていて情景が乏しいという中西さんの評価を受けて、その表現方法について一つ一つ分析しようとしている。

エ 杜甫の詩の表現についての中西さんの発言を受けて、その発言内容を裏付けるような例を挙げながら中西さんの見解に賛同している。

〔問5〕⁽⁵⁾ 皮切り⁽⁵⁾ の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 最高 イ 最初 ウ 最少 エ 最後

第 5 回
(1 月)

テスト 時 間	50 分
平均点 (都標準)	66 点

問題番号			正答率
1	(1)		96.1
	(2)		98.8
	(3)		77.6
	(4)		75.8
	(5)		99.3
2	(1)		74.2
	(2)		82.3
	(3)		72.4
	(4)		82.7
	(5)		63.1
問題番号			正答率
3	〔問 1〕		80.1
	〔問 2〕		84.2
	〔問 3〕		65.5
	〔問 4〕		78.5
	〔問 5〕		65.4
4	〔問 1〕		26.7
	〔問 2〕		80.2
	〔問 3〕		69.0
	〔問 4〕		72.8
	〔問 5〕		3.5点
問題番号			正答率
5	〔問 1〕		47.8
	〔問 2〕		21.8
	〔問 3〕		62.0
	〔問 4〕		61.5
	〔問 5〕		80.2

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

問題
(第5回)

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 突然の落下物に肝を冷やす。
- (2) 新しい生活に期待で胸が膨らむ。
- (3) 緩急自在の投球で打者を手玉に取る。
- (4) 彼のおかげで首尾よく会議が進んだ。
- (5) 温暖な気候を利用して果樹を栽培する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 的に向かって矢をイる。
- (2) テツボウで逆上がりをする。
- (3) さまざまな色の糸で布をオる。
- (4) 受験者と合格者のヒリツが発表される。
- (5) 高校生になったらエンゲキ部に入りたい。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

岩手県の高校に通う「私」（伊智花^{いちか}）は、高校生活最後の絵画コンクールに応募するため、亡^なくなった祖母が好きだった「不動の滝」の絵を描こうと決め、制作に励んでいたが、三年生への進級を目前にして東日本大震災に見舞われた。幸い、「私」の住む地域は被害が少なく、すぐに通常の生活に戻ることができ、新たな気持ちで滝の絵の制作に取り組むなか、「絵画で被災地に届けよう、絆^{きずな}のメッセージ」という企画に出展することを勧められる。「私」は被災地に向けた応援の絵を描くことにためらいを覚えたものの、さまざまに考えを巡らせつつニセアカシアの花の絵を描き上げ、「顔をあげて」というタイトルをつけて出展した。この絵は集められた絵画の作品集の表紙となり、新聞社の取材を受けることになった。

「顔をあげて」このタイトルに込めた思いはなんですか？」

と、若い女性の記者はまぶしい笑顔で言う。あ。絵じゃないんだ。と思った。枝葉のディテールや、影の描き方や、見上げるような構図のことじゃないんだ。時間がない中で、結構頑張^{がんば}って描いたのにな。取材に緊張してこわばるからだから、力がすいと抜けていく感覚がした。この人たちは、絵ではなくて、被災地に向けてメッセージを届けようとする高校生によるこんでいるんだ。そう思ったら胃の底がぐっと低くなって、からだにずっしりとした重力がかかっているような気がしてきた。記者はいますぐ走り書きができるようにペンを構えて、期待を湛^たえてこちらを見ている。「申し訳ない、というきもちです。わたしはすこしライフラインが止ま^{*}ったくらいで、たくさんものを失った人に対して、絆^{きずな}なんて、がんばろう

なんて、言えないです」

(1) 記者は「ンなるほど、」と言ってから、しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくくに触り、それから表紙の絵を掲げるようにして見て、言った。

「うーん。でも、この絵を見ると元気が湧いてきて、明るい気持ちになって、頑張ろうって思えると思うんですよ。この絵を見た人にどんな思いを届けたいですか？」

「そういうふうに、思ってもらえたら、うれしいですけど」

私は、早く終わってほしい、と、そればかり考えていた。描かなければよかったと、そう思った。そのあと、沿岸での思い出はあるか、将来は画家になりたいのかどうかなど聞かれて、私はそのほとんどを「いえ、とくに」と答えた。そばにいたみかちゃん^{*}は手元のファイルに目線を落として、私のほうを見ようとしなかった。記者が来週までには掲載されますので、と言いながら帰って行って、私は、みかちゃんとふたりになった。深く息を吐き、吸い、「描かなければよかったです」と、まさに言おうとしたそのとき、

「このさ、見上げるような構図。木のとっぺんから地面まで平等に、花が降^ふっているとところがすごい迫力なんだよね。光の線も、やりすぎじゃないのにちゃんと光として見える、控^{くわ}えめなのに力強くてさ。伊智花の絵はすごいよ。すごい」

と、みかちゃんはしみじみ言った。

「そう、なんですよ。がんばりました」

と答えて、それが涙声になっているのが分かって、お手洗いへ駆け込ん

で泣いた。悔しいよりも、うれしいが来た。私はこの絵を見た人に、そう言われたかったのだ。

それからの一カ月間、私は不動の滝の絵を力いっぱい描いた。⁽²⁾同級生や親戚から「新聞見たよ」と連絡が来て、そのたびに私は滝の絵に没頭した。へこの絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです。と、加藤伊智花（いちか）さん（盛岡大^{もりおか}鵬高等学校三年）は笑顔を見せた。」

と、その記事には書かれていた。ニセアカシアの絵のことを考えるとからだも頭も重くなるから、私は滝の絵に没頭した。光をはらんだ水しぶきに筆を重ねるごとに、それはほとばしる怒りであるような心地がした。流れろ。流れろ。念じるように水の動きを描き加える。この心につかえる黒い靄^{もや}をすべて押し流すように、真っ白な光を、水を、描き足した。亡くなった祖母のことや賞のことは、もはや頭になかった。私は気持ちを真っ白に塗りなおすように、絵の前に向かった。

描き終えて、キャンパスの前に仁王^{におうだ}立ちする。深緑の森を真っ二つに割るように、強く美しい不動の滝が、目の前に現れていた。滝だった。私が今までに描いたすべての絵の中でいちばん力強い絵だった。「怒濤^{どとう}」と名付けて、出展した。

高校生活最後のコンクールは昨年の優秀賞よりもワンランク下がって、優良賞だった。私よりもどう見ても画力のある他校の一年生の描いた校舎の窓の絵や、着実に技術を伸ばした同学年の猫の絵が、上位に食い込んで

いた。最優秀賞は、私と同じ岩手県の沿岸、大船渡市^{おおふなと}の女子生徒のものだった。ごみごみとしてどす黒いがれきの下で、双葉が朝露を湛えて芽吹く絵だった。あまりにも作為的で、写実的とはいえないモチーフ^{*}だった。色使いも、陰影と角材の黒の塗り分けが曖昧で、朝露の水滴の光り方もかなり不自然。⁽³⁾これが最優秀賞。そんなの可笑^{おか}しいだろうと思った。最優秀賞を受賞した生徒は高い位置にポニーテールをして、肌がこんがり焼けていて、明るそうな人だった。東京で行われた授賞式で、私は初めてその人の顔を見た。

「わたしはあの日、家と母を亡くしました。避難所ですばらく暮らしていた思ったのは『絵を描きたい』という強い思いでした。いまはテニス部だし、しばらく描くことから離れていました。そんなわたしでも、絵を描いている間、わたしはわたしの内側にあるきもちと対話をすることができました。暗いがれきの中で泣いて、怒って、悲しんでいたはずの、どこに向かえばよいかわからなくなっていたわたしは、それでも最後にこの双葉を、気が付いたら、描いていました。こんな栄誉ある賞をいただき、どうしていいのか……」

と、彼女は手元のメモをちらちら見ながら、押し出すようにとぎれとぎれに言った。審査員席に並んでいる六十代くらいの女性は、ハンカチで目元を押さえていた。私も喉の奥がぐつとせりあがってきて、熱くて苦しかった。彼女の言葉には不動の滝を描いた時の自分とどこか重なるものがある。それなのに、私は、それでも。ああ。やっぱり絵じゃないんだ。と思った。審査されているのは純粹にこの作品ではなく、「この作品を描いた高校生」なのではないか。作品と作者の不遇^{ひも}を紐づけてその感動を評価

に加点するならば「特別震災復興賞」という賞でも新設すればよかったのに、とすら思った。

「あのお、本当に、こういった、ね、たいへんな、未曾有^{みぞう}の、あのお、そういう、事が起きたわけですが。こういった状況の中で、えー、筆を持つことを、うん。あきらめなかった彼女に、審査員一同、希望のひかり、そして絵の持つ力を再認識しました」

と、審査員のひとりと言った。その審査員は東京の高校の美術教師だった。震災のことを「あのお、そういう、事が起きた」としか言えないような人が言う「希望のひかり」って、いったい何なのだろう。

無冠の絵となってしまったものの、私は滝の絵をとても気に入っていた。返却された絵を改めて美術室に運び入れ、イーゼルの上にのせる。水面に向かつて茂っている深緑色の木々。その闇を分かつような白い滝。目を閉じれば音が聞こえてくるような水しぶき。その絵の上流から下流まで目で三度なぞり、二歩下がってもう一度眺めた。いい絵だ、と思った。どうしてこれがあのかに負けてしまったのか、本当はまだ納得がいかなかった。

お手洗いから戻ると、下校確認の巡回をしていた世界史の、たしか櫛^{さかき}という名の教師がノックもせず美術室に入ってきて、私の絵を見た。

「CGみてえな絵だな、これ、リアリティがよ。部員が描いたのか？」

私は自分の絵だというのが気恥ずかしくて「そうみたいです」と答えた。「立派な絵だよな。ちよつと、今このご時世で水がドーンと押し寄せてきて、おまけにタイトルが『怒濤』つてのは、ちよつときつすぎるけど、俺は意外とこういう絵がすきなんだよ」

櫛はキャンバスの下につけていたキャプションの紙の「怒濤」という文字を、人差し指でちろちろと弄んでから、イオッシ！早く帰れよな、と言って、次の見回りへ行った。

櫛が出て行ったあと、私はしばらくこの絵に近づくことができなかった。五歩くらい離れた場所から絵を睨^{にら}んでは、さっき櫛が言っていた言葉を何度も頭の中で繰り返した。右足が自然に浮いて、地面について、それを繰り返す。大きな貧乏ゆすりをしている自分がいた。⁽⁴⁾何度か足をあげ、おろす、あげ、おろす。指定靴のスニーカーの底の白いゴムが床につくたびに、きよ、きよ、きよ、と間拔けな音がした。なるほどね。だから、だから私の滝の絵は賞を獲^とれなかったってことね。私から私が剥がれていく感覚がした。あーあ、そういうことだった。だった。でした。はい。なるほどね。なるほど、なの？ 黙ってニセアカシアの絵を描けばよかったんだろうか。心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があって前向きなもの。鳥や、花や、空を、描けば。

「この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです」

と、小さく声に出して言う。言つて、左足を下げて、助走をつけて絵に向かつて走る。迫力のある滝のしぶきに私が近づいていく。蹴とばそう、と思った。こんなもの、こんなものこんなもの！ 私は思い切り右足を後ろに振り上げて、その反動を使って勢いよく蹴った。いや、蹴ろうとした。「んら！」と、声が出た。しかし私は絵を蹴ることができなかった。咄嗟^{とっさ}に的をずらし、イーゼルを蹴った。蹴り上げられたイーゼルの左の脚が動

いてバランスが崩れ、キャンバスの滝がぐらり、と大きく揺れた。私は倒れ込もうとする滝へ駆け寄った。両手でキャンバスの両端を支えて持ち上げると、イーゼルだけが鋭い音を響かせて床へ倒れた。

吹奏楽部の金管楽器が、ぱほおー、と、さっきから同じ音ばかりを出している。それがそういう練習だと知っていても、間抜けなものだった。⁽⁵⁾ 夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた。

(くどうれいん「氷柱^{つらら}の声」による)

〔注〕 デイテール——細部。

ライフライン——生活の維持に必要な、電気・ガス・水道など。

みかちゃん——美術部の顧問の先生。

モチーフ——題材。

イーゼル——絵を描くときにキャンバス(画布)を載せる台。

CG——コンピューター・グラフィックス。コンピューターで

作成された画像や動画。

〔問1〕⁽¹⁾ 記者は「ンなるほど、」と言ってから、しばらくペンを親指の腹

と人差し指の腹でくにくに触り、それから表紙の絵を掲げるように

して見て、言った。とあるが、この表現から読み取れる記者の様子

として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「私」が自虐的な言葉を口にしたことに驚いたが、絵のすばらしさを

具体的に伝えて、前向きな気持ちになってもらおうと考えている様子。

イ 「私」が震災によって心に深い傷を負っているのを感じ取り、つらい

記憶を思い出させるような取材を続けてよいのか思い悩んでいる様子。

ウ 「私」が緊張しすぎて思うように話せなくなっていることに気づき、少し間をおくことでじっくり考えをまとめさせようと気遣っている様子。

エ 「私」が期待していた答えと異なる返事をしたことにとまどい、期待通りの答えを引き出すためにどう問うかを改めて思案している様子。

〔問2〕⁽²⁾ 同級生や親戚から「新聞見たよ」と連絡が来て、そのたびに私は

滝の絵に没頭した。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近

いのは、次のうちではどれか。

ア 記事を読んで多くの人たちが応援してくれるのをありがたく思い、高校時代の集大成となるような絵を仕上げて賞を獲ろうと意気込んでいる。

イ 言ってもいけないことが書かれた記事が注目を集めていることにとまどい、取材のときに自分の思いをきちんと話すべきだったと後悔している。

ウ 絵自体の価値と異なる部分で絵が評価されることにわだかまりを感じ、滝の力強い流れを描くことで鬱屈した感情を押し流したいと思っている。

エ 大した被害も受けていないのに被災者を応援する絵を描いたことを後悔し、これからは自分にとって身近なものだけを描こうと決意している。

〔問3〕⁽³⁾ これが最優秀賞。そんなの可笑^{おか}しいだろうと思った。とあるが、

「私」がこう思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 被災の状況を想像して描いたものであることがはっきりわかり、感動を押し付けるような構図や色使いが不快に感じられたから。

イ 絵のモチーフに震災からの復興を意識したわざとらしさが感じられるうえ、絵を描く技術面でも稚拙さが目につくと思ったから。

ウ 震災時の生々しい情景は被災者を応援するメッセージとしては不適切

であるうえ、技術的にも優れた作品だとは到底思えないから。

工 震災の傷跡がまだ残る状況にあって復興を強調したモチーフは、現実から目を背け、空想に浸っているだけのものと考えたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 何度も足をあげ、おろす、あげ、おろす。指定靴のスニーカーの底の白いゴムが床につくたびに、きよ、きよ、きよ、と間抜けな音がした。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 被災者の気持ちを思いやれなかった自身の未熟さに気づき、落ち込んでいる「私」の様子を、軽快な足の動きや靴音と並べて描くことで対照的に表現している。

イ 賞を獲れなかった怒りが頂点に達し、滝の絵を蹴飛ばそうと準備をしている「私」の様子を、足の動きや靴音を順序立てて描くことで段階的に表現している。

ウ 榊から絵をほめられたことで、コンクールの審査への不信任感が深まっている「私」の様子を、不安定な足の動きと不気味な靴音を描くことで感覚的に表現している。

エ 賞を逃した理由に対して繰り返し考え、徐々に怒りを募らせている「私」の様子を、反復する足の動きとその靴音を短く区切って描くことで印象的に表現している。

〔問5〕⁽⁵⁾ 夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 滝の絵が無冠に終わってしまったことは納得できないが、客観的に見

ればコンクールに出品された絵の中で、自分の絵が最も優れていたと確信し、これからも自分の好きな絵を描き続けていこうと思っている。

イ 絵自体が評価されない不条理を感じているところに、題材が時世に合わない判断されたことで賞を逃したかもしれない可能性に気づき、自暴自棄になりつつも、全力で描き上げた絵をいとおしく感じている。

ウ 滝を題材にしたために賞を獲れなかったことは悔しいが、これは自分の描いた滝が津波を想起させるほど写実的で、迫力があったことを示しているのだと気づき、改めて滝の絵のすばらしさを実感している。

エ どんなにすばらしい絵を描いても他人から評価されなければ意味がないと思って、滝の絵を蹴り壊したくなっていたが、榊にほめられたことで絵のすばらしさを再確認し、大切にしようと思い直している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

近代社会は「連帯」を人間にとっての大事な理念ととらえてきた。たとえばフランス革命の理念は自由、平等、友愛であり、友愛とはすべての他者に惜しみなく愛をささげることなのだから、そこに連帯の基盤をみいだしてもかまわないだろう。働く者の連帯、貧しき者との連帯、差別された者との連帯……。私たちの歴史はどれほど多くの連帯という言葉を使ってきたことだろう。（第一段）

だが、にもかかわらず、現代史のなかで「連帯」は衰弱しつつづけたのである。もちろん一部の人は本気で社会的な連帯を創造しようとしてきた。しかし全体としては連帯なき個人の社会がひろがり、自分の世界だけを守ろうとする自己防衛的な精神が社会を覆ってきた。（第二段）

⁽¹⁾とすると近・現代史のなかで語られてきた「連帯」のとらえ方に、何か問題があったということにはならないだろうか。（第三段）

この課題を考えていくために、私はまず近代以降の連帯の対象からはずされていた自然との連帯について検討してみようと思う。近代・現代的な連帯は人と人の連帯だけを課題とし、その結果連帯の対象から自然が抜け落ちるという欠陥をもっていたということは、いまではいうまでもないことであろう。（第四段）

自然との連帯について考察しようとき、私たちを困惑させることのひとつは、自然と人間の関係の複雑さである。たとえば私が一年の半分くらいを暮らしていく群馬県の山村、^{うえの}上野村をみると、村人たちはこの二十年ほどの間イノシシ、シカ、サルなどによる畑の被害に悩まされてき

た。私の狭い畑でも一年間ほとんど作物が収穫できなかった年もあったほどである。こうなってくるとある種の動物たちは、人間にとって害獣であるといわざるをえなくなってくる。（第五段）

さらにそれは、人間に対してだけ、でもないのである。というのはシカの増加によって山にはえているササが食べ尽くされるようになってきた。そればかりではなく広葉樹の木の皮も食べられて、山に枯れ木がひろがり、さらに土から出た草や木の芽も食べられて山の砂漠化がすすみはじめたのである。こうなると雨が降るたびに土壌が流出し、山はいかなる生物も暮らせない場所になっていく。シカの増加によって、自然にとってもシカは害獣だといわざるをえなくなってきたのである。（第六段）

⁽²⁾ところが別の見方もできる。山村はもともとは自然の世界であった。その自然の世界に人間たちが畑をつくり、村をつくって侵入した。だから過疎化や高齢化がすすんだ現在、動物たちが人間という侵略者から自然の世界を奪い返しはじめたとみることできる。さらにシカによって砂漠のような山がひろがったとしても、エサがなくなればシカも個体数を減らしていくだろう。そしてその頃、土壌が流出し、^{*}腐葉土層を失った山では、栄養状態の低い土壌に適した草木がはえてくることになるだろう。こうして何百年かすれば、山は再びその時の状況に合った安定した自然を形成していくことになるだろう。（第七段）

とすると私たちが自然と連帯するとは、どのような自然に対してなのか。現状の自然を守ることが自然との連帯なのか。それとも変化していく自然と連帯することが重要なのか。しかもここには人間の生存をどう位置づけるのかという課題もある。自然が侵略された大地を人間から奪い返しはじ

めたと考えることはひとつの視点ではあろうが、しかしそのとき人間が暮らすということをどう考えたらよいのか。(第八段)

自然と人間の歴史をみると、そこでは三つの関係が複雑にからみ合ってきた。ひとつは相互にいかなる害も与えないような共存の関係である。たとえば人間が川から水を汲み、ささやかに山菜や茸、マキなどを採取したとしても、自然に大きな変動を与えることはなかったように、である。第二に相互に恵みを与える、という関係があった。自然は人間に対してさまざまな恵みを与えるが、逆に人間が溜池や水路、水田をつくり、一部の山の本を切ったりすることによって暮らしやすい環境が与えられていく生物もいた。人間の活動が生物の多様性を高めるという一面もまたあったのである。(第九段)

そして第三は対立する関係だった。いうまでもなく人間による大規模な開発は自然を衰弱させる。だが自然もまた洪水や津波、地震や噴火などを起こして人間に禍をもたらししてきた。自然と人間のあいだには、共存、互惠、対立という三つの関係が複雑にからみ合いながら展開してきたのである。(第十段)

とすると自然と連帯するとはどうすることなのか。人間にとって都合のよい部分だけと連帯するというのでは、自然そのものと連帯したことにはならないだろう。といって、今日の山村の動物被害の問題をもふくめて、「禍」としての自然とも連帯するというようなことが可能なのだろうか。(第十一段)

実際には人と人との連帯でも同じことが成立するのである。人と人の間にも、お互いにいかなる損傷も与えないような共存関係も成立するし、お

互いに恵みを与えるような関係もありうる。ところが対立的な関係もまた成り立つのである。だから対立的な部分もふくめてどう連帯するのかを考えなければ、しよせん強者による都合のよい連帯になってしまう。連帯の出发点が他者のかけがえのなさを認め、手を差し伸べあうところにあるなら、対立する他者のかけがえのなさも認められなければならないだろう。この問題が解決されないかぎりには、どんなに「美しい連帯の物語」を語ったとしても、しよせんそれは、ヨーロッパ近代が生みだした理念を他者に押しつける連帯でしかなかったという、近代・現代的な連帯の負の側面を払拭するものではない。(第十二段)

自然との関係においても、また人との関係においても、共存、互惠、対立の三つの関係が存在する。とするとこの問題に対して、資本主義も市民社会や国民国家も成立していない時代の人々はどのように対応してきたのだろうか。(第十三段)

日本についてみるなら、まず第一に気付くことは個人と個人の連帯ではなかったことである。個人の基盤には共有された世界があった。たとえば村は個人が集合している場所ではなく、共有された世界に個人が参加している場所である。そしてこの共有された世界を基盤にして、人々はときに自然と連帯し、ときに他の村という別の共有された世界と連帯してきた。(第十四段)

第二に共有された世界をとおしておこなわれる連帯の基本は、折り合いをつけることにあった。正しい理念にもとづいて連帯しようという発想ではなく、さまざまなかたちで現れてくる自然をふくむ他者と、折り合いをつけていくということである。(第十五段)

たとえば自然と人間の間にある共存、互恵、対立という三つの関係は、そのいずれもが自然と人間の関係の本質であり、そのどれかが正しく、どれかが誤っているわけではない。自然と人間が存在するというそれ自身の内に矛盾が内在しているのである。そうである以上、矛盾とつき合っていることが連帯である。⁽³⁾とするなら自然と人間との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない。そして折り合いをつけようとすると、それは個の力で成し遂げられるものではなかった。共存、互恵の関係ならまだよいが、対立とも折り合いをつけようとすると、どうしても共同の力が必要になってくる。たとえば氾濫する川とも折り合いをつけようとすれば、共同で堤や河畔林をつくり、遊水池を設け、それでも氾濫したときには水が引いた後の復旧を共同でおこなっていくことが必要だった。共有された世界を介して対応したからこそ、対立する自然とも折り合いをつけることができた。(第十六段)

ここから私たちはいくつかの教訓を学ぶことができる。近代以降生まれてくる連帯は、正しい理念にもとづいておこなわれるものと考えられてきた。だから、たとえば弱者と連帯するのは正しいこと、つまり正義だったのである。そして連帯の出発点は個人の意志にあると考えられてきた。それに対して日本の伝統的な民衆の発想は、正義を求めるのではなく矛盾を受け入れていくことであり、連帯の出発点は共有された世界の方にあった。(第十七段)

これからの社会ではさまざまな連帯が求められていくことになるだろう。労働と労働、あるいは労働者と労働者はどのように連帯していったらよいのか。ここで必要になるのは労働者と労働者の関係のなかにある矛盾をど

う受け入れていくかであろう。そして、その矛盾と折り合いをつけることが可能な自分たちの共有された世界を、どう築いていくかである。(第十八段)

自然と人間の連帯、地域社会での連帯、都市と農山漁村との連帯、高齢者と若者の連帯、健常者と障害者の連帯、異なった文化のもとで暮らす人々との連帯……。それらのあり方をひとつひとつみつけていく積み重ねの先に、私は今日の社会システムとは異なる未来の姿が少しずつみえてくるような気がする。(第十九段)

(内山 節「怯えの時代」新潮社 による)

〔注〕腐葉土層——落ち葉が積もって腐った、養分に富んだ土の層。

払拭——すっかり取り除くこと。

〔問1〕⁽¹⁾とすると近・現代史のなかで語られてきた「連帯」のとらえ方に、

何か問題があったということにはならないだろうか。とあるが、
「近・現代史のなかで語られてきた『連帯』のとらえ方」の問題とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 自然を連帯の対象とする視点や、対立する他者どう連帯するかという考えに欠け、近代的な友愛の理念を正しいと信じて、それを個々人が他者に押しつけるだけの連帯になってしまったこと。

イ ヨーロッパ近代が生み出した理念を連帯の基盤ととらえて、その理念を一方的に他者に押しつけるようになり、共存関係にある他者のかけがえのなさを認めるという姿勢が失われていったこと。

ウ 連帯の出発点は個人の意志にあると考え、連帯の基盤となるような共

通の理念を提示してこなかったため、自己防衛が優先される時代において、社会的な連帯が創造されなかったこと。

工 人間どうしが他者のかけがえのなさを認めて手を差し伸べあうことのみを連帯と考え、自然が連帯の対象から抜け落ちてしまった結果、自然と人間との対立がかえって深刻化してしまったこと。

〔問2〕⁽²⁾ ところが別の見方でもできる。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 山村の動物被害の実態を見ると、シカは人間にとって害獣であるだけでなく、自然にとっても害獣であると言わざるをえないということ。

イ 山村の動物被害の問題は、動物が引き起こしたのではなく、山村に住む人々の高齢化や過疎化が原因で起きたと考えられるということ。

ウ 山村の動物被害は、人間に害をもたらすだけでなく、自然破壊にもつながり、結果として動物たちの生存をおびやかしているということ。

エ 山村の動物被害は、自然が侵略された大地を人間から奪い返し、安定した自然を形成しようとする現象と捉えることもできるということ。

〔問3〕 この文章の構成における第十三段の役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 前段で述べた主張について、それと反対の内容を具体例とともに提示すること、話題の転換を図っている。

イ 前段で述べた主張について、別の見解とそれに対する疑問を提示すること、自説の妥当性を強調している。

ウ 前段で述べた主張について、これまでとは別の観点から新たに問題提起すること、論の展開を図っている。

工 前段で述べた主張について、その根拠となる具体例を挙げて詳しく説明すること、論をわかりやすくしている。

〔問4〕⁽³⁾ とするなら自然と人間との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 自然と人間との間にも、共存、互惠、対立の三つの関係が存在するが、人間どうしの関係では対立する相手と関わらずに生きることができない一方で、自然と関わらずに生きていくことは不可能だと考えたから。

イ 自然との関係は人間にとって都合のよいものばかりではなく、対立する関係もあり、そのどれもが自然と人間の本質であるため、人間と自然が共に存在すること自体が矛盾をはらんでいると考えたから。

ウ 自然と人間との間にある共存、互惠、対立という三つの関係のうち、どれが正しくてどれが誤っているかを人間が判断するのはおこがましいことなので、全面的に自然を受け入れなければならないと考えたから。

エ かつて自然と人間は共存や互惠の関係が成り立っていたが、近代以降人間と自然とが互いに害しあうようになり、資本主義の進展に伴ってその対立は簡単には解決できないほど深刻になっていると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「人と人との連帯について」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときあなたに話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

次のAは『枕草子』^{まげらのそうし}について書かれた文章であり、Bは文章中に出てくる『枕草子』能因本^{*のういんぼん}「跋文」^{*ばつぶん}の原文の一部である。また、あとの内の文章はBの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

A

春は、あけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

（春は、あけぼの。ようやくそれと分かるようになってきた空と山の境目が、ほんの少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているとき）

（『枕草子』初段「春は、あけぼの」）

『枕草子』執筆のきっかけが中宮定子^{*ちゆうぐうていし}から拝領した大型の冊子^{*}であったことは、「序章」で確認した。そこで見たように、『枕草子』能因本の「跋文」によれば、定子は当初それに『古今和歌集』を筆写させるつもりだった。『古今和歌集』は、平安中期、醍醐天皇^{だいご}の命によって作られて以来、貴族たちの雅^{みや}びの手本集と崇敬された勅撰和歌集^{ちよくせん}で、大型冊子に書かれるにふさわしい選択だった。が、それに代わるものとして新作『枕草子』が企画されたのだった。そしてこの初段「春は、あけぼの」は、そのことへの清少納言^{せいしょうなごん}の答えである。

初段がどの段階で『枕草子』に書かれたかについては諸説がある。だが

どの説も、清少納言が強い編集意図を持ってこれを作品の扉に据えたという見方では一致している。それはあるいは、既に定子が亡くなった後のことであつたかもしれない。しかしもし定子の生前のことであつたなら、清少納言から献上された草子を開き冒頭にこの一節を見た時、中宮定子は必ずや胸を打たれたに違いない。ここにはいくつもの意味で〈定子自身〉がいるからである。

春は、あけぼの。「春は？」とその象徴を問いかけられた時に、普通は誰がこう答えるだろうか。春は桜。あるいは、春は鶯^{うぐいす}。⁽²⁾春風などと答える人もいるかもしれない。いずれにせよ、多くの人は何かしら春を代表する「物」で答えるだろう。その思考法は、平安人も現代人と変わらない。この初段のように⁽³⁾で答えるという発想はまずあるまい。その意味で、『枕草子』は最初の一文から斬新だ。

加えて、この「春は」には、通常なら当然登場すべき春の要素が登場しない。春を代表する物と言え、現代社会においても一般にはやはり桜だろう。定子が崇敬し、当初冊子に筆写させようと考えていた雅^{みや}びの手本集『古今和歌集』も、春の巻は半数以上が桜を詠んだ歌である。平安人たちは、春になればすぐに桜を案じ、早く咲かないかと心待ちにした。咲けば咲いたで、咲き初め、咲き誇り、散る様の一つ一つを愛^めでた。それは千年後の今も同じことだ。桜こそが春の主役であることは、誰しもが認めることだろう。にもかかわらず、『枕草子』初段の「春は」には桜の姿も形もない。『枕草子』は、世の中が当たり前に思い浮かべる、紋切り型の発想をしないのだ。

では、「春は、あけぼの」は、雅^{みや}びの世界から外れているのか？「春

と「朝」は品格の無い取り合わせなのだろうか？ そうではない。実は『古今和歌集』に、「春」と「朝」の取り合わせが何度も記されている文章がある。和歌の力と歴史を記し和歌文化を高らかに謳った「仮名序」、文字通り仮名で書いた序文である。そこには、いにしえから人々が四季の様々な風景につけて歌を詠んできた典型例として、「春の朝」に花を詠むという雅びが記されている。『枕草子』はここから花を抜いただけだ。決して雅びの外にあるものではない。⁽⁴⁾むしろ『古今和歌集』「仮名序」を知っていてこそ、それを革新させた機知である。『枕草子』の冒頭、まさしく『古今和歌集』にとつての「仮名序」の位置にこれを置くことで、『古今和歌集』の向こうを張った企画『枕草子』の心意気を、清少納言は示したのだ。

実は、これこそが定子という人の文化だった。ありきたりではなく、非凡なものを。右にならえではなく、自分の感覚で工夫して。定子はそれを、後宮で女房たちに説いてきた。定子が司った知的なサロンにおけるそのした場面は、『枕草子』の随所に見ることができる。

(山本淳子「枕草子のたくらみ」による)

B

宮の御前に内^{おまえ}の大殿^{*うち}の奉^{おとど}らせ給^{たてまつ}へりける草子^{*}を、「これに何をか書かまし」と、「上^{*}の御前には史記^{*}といふ文^{ふみ}をなむ、一部書かせ給ふなり。古今をや書かまし」などのたまはせしを、「これ給ひて、枕にし侍^{はべ}らばや」と啓せしかば、「さらば得よ」とて給はせたりしを、持ちて、里にまかり出でて、御前わたりの恋しく思ひ出でらるることあやしきを、故事や何や

と、尽きせず多かる料紙を書き尽くさむとせしほどに、いとど物おぼえぬことのみぞ多かるや。

(『枕草子』能因本「跋文」)

中宮様に内大臣様が献上なされた草子について、中宮様が「これに何を書こうかしら」とおっしゃり、「帝^{みかど}は、『史記』という漢籍を、一部お書かせになるとのことよ。こちらは『古今和歌集』を書こうかしら」とおっしゃったので、「これを頂いて、枕に致したいものですわ」と申したところ、「ならば受け取りなさい」と下されたのだ。それを持って自宅に戻り、中宮様の御前が恋しく思い出されること狂⁽⁵⁾おしいほどであるなか、故事や何やと書いて使い切れないほど大量の用紙を使い切ろうとしたものだから、訳のわからない記事ばかりでいっぱいになってしまったこと。

〔注〕能因本——『枕草子』の写本の系統の一つ。

跋文——あとがき。

中宮定子——一条天皇の皇后。清少納言が仕えた人物。

冊子——ここでは、白紙をとじた冊子。当時の冊子は、大きさ

と品格が対応しており、大型の冊子は格式のある書物を書くためのものだったと考えられる。

後宮——皇后などが住む宮殿。

女房——朝廷に仕える女官。

サロン——文化交流の場。

内の大殿——当時の内大臣である藤原伊周。中宮定子の兄。

草子——紙を重ねて糸でとじたもの。ここでは、白紙の冊子のこと。

上の御前——帝。ここでは、一条天皇のこと。

史記——中国の歴史書。漢学で当時最も重要視されていた書物。

〔問1〕⁽¹⁾ 清少納言から献上された草子を開き冒頭にこの一節を見た時、中

宮定子は必ずや胸を打たれたに違いない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 『枕草子』の冒頭の一節に描かれた春のあけぼのの美しい情景から、清少納言の定子に対する敬愛の思いが伝わってくると考えたから。

イ 『枕草子』の冒頭の一節に、ありきたりな春の要素が登場しないことは、定子が特別な存在であるということを示していると考えたから。

ウ 『枕草子』の冒頭の一節に、定子が説いてきた、非凡で斬新なものを自ら工夫して創り出すという文化的志向が表れていると考えたから。

エ 『枕草子』の冒頭の一節には、定子が実際に目にした春の情景が描かれていて、後宮での雅びな暮らしを思い起こさせると考えたから。

〔問2〕⁽²⁾ 春風などと答える人もいるかもしれない。とあるが、この文の主語を一文節でそのまま抜き出して書け。

〔問3〕⁽³⁾ にあてはまる言葉として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 色彩 イ 印象 ウ 空模様 エ 時間帯

〔問4〕⁽⁴⁾ むしろ『古今和歌集』『仮名序』を知っていてこそ、それを革新させた機知である。とはどういうことか。次のうちから最も適切な

ものを選び。

ア 『古今和歌集』で示された春と朝と花を取り合わせるといふ雅びの典型からあえて花を抜くことで、新たな雅びの形を示したということ。

イ 『古今和歌集』には春の朝を詠んだ歌がいくつも収録されていることを知ったうえで、あけぼのを春の象徴として提示したということ。

ウ 『古今和歌集』では春と朝を品格のない取り合わせであるとされているのに対抗して、春と朝とで雅びの世界を描き出したということ。

エ 『古今和歌集』に桜を詠んだ歌が数多くあることから、月並みな発想を避けるため、わざと雅びの典型から外れた表現をしたということ。

〔問5〕⁽⁵⁾ 中宮様の御前が恋しく思い出されること狂おしいほどであるなかとあるが、「狂おしいほどである」に相当する部分を、Bの原文中から四字でそのまま抜き出して書け。